
End Of Chapter One

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End Of Chapter One

【コード】

N1670V

【作者名】

そら

【あらすじ】

世界がこんなに美しいだなんて知らなかった

目が覚めるとそこは夢のような世界だった。

最初に夢の中であったその人は嗤って言った。「お前の命は俺のもの」

菜摘が世界で初めて出会った少年は、菜摘と一緒になのに、違っていった。セスは言った。「君ははやくここを出なければいけない。」わたしがわたしで在るために。貴方が貴方で在るために。わたしは

何ができるのだろう。

平凡な女子高校生が異世界にトリップしてわたわたするお話。

第一章 真っ白に塗り潰された世界 <プロローグ>

「じゃあね、菜摘！連休だからって浮かれて暴飲暴食しないように！」

「あはは、それは流石にこないで懲りたもん。それに明日は弟と一緒に海に行く予定があるからだいじょーぶだよ！」

「あんだなら海の家で焼きそばとかかき氷とか買い漁りそうだけど」

む、ばれたか、あっさりと自分の思考回路を友人達に読まれていた事に苦笑しか出てこない。我ながらどこまで単純なのだ、いや目の前の彼女達はそれだけ長い付き合いなのだから当然なのだ、とも思う。

すでに当たり前の日常、ありふれた光景。

下校時間なのに日がまだ上の位置にいるのは夏がもうそこに迫っているからだろう。同じ制服を着た若者達が視界のあちこちに入る。

皆総じて表情が明るいのは明日から待ちに待った連休が始まるからで、仲良く休日の計画を立てる者、急ぎ足で帰路につく者、それぞれだ。

週休二日という制度が出来たせいで、授業内容や時間にしわ寄せがくるなど何がゆとり教育だと愚痴をこぼす一方で、こうしていざ連休を迎えると一転して心が躍るのは我ながら都合が良い話だと思う。そんな事はさて置き少女も例に漏れず、明日は可愛がっている少し歳の離れた弟と電車で数駅離れた海に行く予定を立てていた。まだまだ夏本番には早い、海開きの情報を聞きつけて可愛らしくねだる弟に二つ返事を返したのは一昨日の晩のこと。

友人達に手を振り見慣れた通学路を、いつもより少し浮き足立って

歩いていたのは他でもない少女自身の落ち度で、普段ならそれを落ち度などと言いはしないほど些細な事でもあったのだけれど。

賑やかな繁華街の交差点で大きく鈍い音が響き渡ったのは、少女が丁度大きな交差点に差し掛かった時だった。

それは普段の賑やかな喧騒とは異質なもので。

その瞬間、悲鳴や混乱が辺りを覆いつくし、一気に混乱の渦が巻き起こった。

「きゃー！！誰か！」

「おい！人が轢かれたぞ！！！」

「救急車を呼べ！！！」

まるでテレビ画面を見ているように無機質にゆっくりと全てが流れていく。普段ブラウン管の向こう側はどうなっているのだろうか、だなんて考えたこともない。ただ非日常の情報を、時には日常的なものを得ることもあるけれどブラウン管を通すといまいち実感が沸かないのだ。遠隔操作で送られてくる情報をただ視覚的に捉える。これはその感覚によく似ている。ただ水道から水が流れるように人々の叫びが画面の向こう側、自分にまるで関係のないもの。他人事のように、ただ視線に入ったもの、耳に付いたもの、として流れていく。感覚は、ない。何が起きたのか、考える気力も沸かない。全ての感覚をどこかに置いてきて、ただ、視線だけが宙を彷徨っていた。

青い、青い空にぼつんと太陽が一つ。それが酷く孤独に見える。あれだけ輝いているのに、何故か孤独に見える。それが妙にも悲しくて空に手を伸ばそうとして手の感覚がないことに気が付いた。

嗚呼、混乱しているのだ、だってこんなことはじめてじゃないか。

はじめて、なにが？

なんで？はじめて？

今、自分の身に何が起こっているのか、もう少しで理解できそうな気がする。

それはとてももどかしくもあり、同時に心地よかった。

そして次第に視界も聴覚も薄れていく。

明日は大切な約束があるのに。

久しぶりの海、明日は快晴だって聞いた。楽しみねって一緒にお弁当作ろうって話をして、弟の小さな手で作ったおにぎりと自分の不格好なおにぎりが仲良く並んだお弁当を想像して二人で笑って。約束、守らなきゃ…

「…し…ん…」

最後に最愛の弟の名が言葉にならない音として少女の口から漏れたが、喧噪の最中耳にしたものはいなかった。

可もなければ不可もなく、

人が右に行けば右に行き、左に行けば左に行く。 > b r <
成功することもあれば時々失敗もしたし、けれども出来るなら挫折は味わいたくないと、時には保守的に石橋を適度に叩きつつ歩いてきた。 > b r <

学校での成績も中の中。素行だつて良くも悪くも先生に目をつけられることもなく。 > b r <

漫画の中のヒロインのように可愛いね、とちやほやされたこともなく、もちろん告白された経験なんてあるわけがない。 > b r <

今まで生きてきた中で、最大のピンチは小さい頃に一回、公園の鉄棒から落ちて血まみれになって救急車で病院に運ばれたこと。それ以来高い所が苦手になったくらいだ。そもそも鉄棒はそれほど高くなかったのだが子供心にその時は何十メートルも高い所から落ちてしまったような錯覚に陥つたのだ。 > b r <

今考えると愚かなことだが、子供の頃のトラウマというのは結構引きずるらしい。 > b r <

ああ、そういえば近所の犬に噛まれて追いかけて回されたこともあったかな。 > b r <

こんなことをピンチと呼ぶのか怪しいくらいだが。 > b r <

そんなこんなで至つて平凡に生きてきたつもりだ。 > b r <

こうしてしみじみと考えなければきつと気付かなかつただろう。 >

b r <

当たり前だと信じ切っていた世界。 > b r <

社会に守られて、そのちっぽけな世界の中で、何一つ不自由なく過ごす事が当たり前でそれに感謝する所か退屈だ、と感ずることさえしばしばあった。 > b r <

> b r <

> b r <

> b r <

人は死ぬとき、生前の記憶が走馬燈のように駆けめぐるとい話を聞いたことがあるが、もしかしたらあながち嘘ではないのかも

> b r <

> b r <

薄れゆく意識の中で、ぼんやり、と思った。 > b r <

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

ごちゃごちゃ考えていたってしょうがない。 > b r <

始めなければ始まらない。 > b r <

無理だと諦めていたってしょうがないのよ。 > b r <

あの時私が見た夢は遠くなんかなくて、こんなに近くにある。 > b

r <

手を伸ばせばほらこんなに近い。 > b r <

世界の全てが敵だと思ったこともあった。 > b r <

結局信じられるのは自分だけだと、 > b r <

歩む道に強固な壁を張ったとて、 > b r <

意味がないものと崩す勇気がちっぽけな私にはなかった。 > b r <

信じられなかったのじゃなくて、信じようとしなかっただけ。 > b

r <

人なんて所詮一人で生きていくもの、なんて勝手に悟って > b r <

勝手に孤独を感じて空を仰いだけれど > b r <

虚しさに心が冷え切るばかりで、澄んだ空も空気もただ凍みるだけ。

> b r <

愚かな私の愚かな独りよがりで、きつと沢山のものを失ったけれど

> b r <
いつしか、支えてくれた沢山の優しさ気付くのだろづ。 > b r <

第1話

「おい、起きろ」

誰かが呼ぶ声が聞こえる。

聞き慣れない声だ。

少しずつ覚醒しつつある脳裏で、疑問を抱きつつ瞳を開ける。そこは自分が何処に居るのかすらわからない闇に包まれていた。全てが曖昧な暗闇は、気を抜いた瞬間に全てを飲み込んでしまいそうな気がした。

ゆっくりと思考を巡らせる。覚醒したばかりの頭で、今の現状を把握することには無理があった。

あまりに深い闇に、自分が本当に目を開いているのかすら曖昧で

「ここは、どこ...?」

自分の漏らした声はどこに行くのだろう。自分は今、何処に存在しているのだろうか。不安が不安を呼び、まるで意味がないと知っていないながら辺りを見渡す。声の主はどこにいたのだろうか。倒れていた体を支えるために床に手をつくすと、温かくも冷たくもない、やはり曖昧な感触がした。

「よつやくお目覚めか」

また、どこからとも無く声が聞こえてきたことに安堵する。同時にその声がどこから来ているものなのか不安になる。

「誰？どこにいるの？というか此処はどこ？」

質問を問いかける辺りに相手はいるのか、声は聞こえるが姿を確認できるほど暗闇に慣れていなかった。もしかすると永遠にこの闇に慣れることはないのかもしれない。だけれど相手には奈摘の姿は見えていないらしい。彼女が挙動不審にきよろきよろと辺りを見渡している様子に笑いを零す音が聞こえた。

「お前は本当に何も知らないんだな。まあ世の中には知らない方が幸せな事もあるが」

果たしてお前はどちらだろうな、と再び含み笑いを零す。

ああ、この声は、安心できない。菜摘の脳裏を警告の二文字が走った。

視覚で捉えることのできない不安がこれほどとは思わなかった。唯一機能している聴覚だけではこんなにも心許ないなんて。

「どつという意味？」

声の主はまるで奈摘の疑問に答える気はないらしい。

答えのない問いは、闇に紛れて見えなくなる。

「此処はどこか？そうだな、此処はどこでもない。」

「え？」

「知る必要もないし、知っても意味がないことだ。」

意味がない。

あまりの言いぐさに思わずぽかん、とする。どう考えても今必要な情報だと思うのに。そして次の言葉で菜摘の思考は、完璧に混乱した。

「此処はな、お前がいた世界にも存在しないし、何処の世界にも存在しない。」

くくく、とおかしそうに笑う声が闇に溶けた。完璧な闇の世界にそれは妖艶で異質でいて当たり前のように。

何処にも存在しない…それは菜摘自信も存在しないという事なのか。自らを支えているこの腕も、此処では何も見ることのできない瞳も全てがただ自分自身が在ると思っただけで、存在していないのかもしれない。この底なしの闇の前では全てにおいて説得力があるように感じられた。

「お前が存在しているかどうかなんて考えるだけ無意味だぜ。そもそもここ自体が存在してないのだからな。」

まるで全てお見通しとばかりに声が響いて闇に紛れた。そうしてなんだか自分の存在も曖昧になり、さっきよりも闇が深くなった気がした。いや、違う、菜摘自身が闇に同化してきただけなのかもしれない。

「何がどうなってるの……」

今更ながらに言いようのない不安が込み上げてきて思わず握りしめた拳すらもそこに在るといふ実感が湧かない。自分はどうなってしまったのだろう、しかしその問いに答えてくれるほど声の主は親切ではないらしい。

「とじろで」

菜摘の戸惑いなど意にも介さず、一方的な声がさらに突拍子もない問いを投げつけた。

「奈摘、お前の命俺に預けてみないか？」

「……………」

言葉を理解するのにたっぷり数分かった。

そして菜摘は自分の耳を疑った。なんで相手は私の名前を知っているのか？ いやそれ以前に声の主はとんでもない発言をしなかっただろうか。どこから突っ込んでいいのだろうか。啞然とするとはこの事だ。というか突っ込んでもいいのだろうか。この状況下で、全ての問いに対する答えなど殆ど意味を持たないことを何となく理解していた。先ほど声の主がそう言ったように。

「俺に命預けるよ。」

反復された言葉ははつきりと奈摘の耳に届いた。どうやら間違いではない。しかも今度は命令形である。

「は…:…?」

その型破りな発言に、恐らく十人中十人が同じ返答を返すだろう。勿論例外でなく奈摘も固まった。啞然とした。冷静に考えてみる。もしかしてこれは口説かれてるのだろうか。だとしたらあんまりすぎる口説き文句だ。いや冷静に考えるからこそ、それはない。これは新手の宗教勧誘か何か、若しくは変質者に遭遇しているのかも

しない。

「お断りします…」

どうしよう、学校で習った変質者の対処法をいくつか頭に描いてみようかと奮闘するも、まったく浮かんでこなかった。自分がいかに本番に弱いタイプであるかを思い知らされた。昔からテストでも習い事の発表会でも、本番になると緊張して頭が真っ白になるのことで、なんて日常茶飯事で・・・ああ泣きたい。多分もう泣いてる。

「ふ、普通に考えておかしいよ、だってわたし貴方に会ったのが初めてだし、ていうかこれ会ったって言うの？初対面の見ず知らずの、しかも顔も見えない超不審人物に「そうですか、わかりましたお預けします。大切なものなので大事にして下さいね。」って簡単に言う人間なんている？命ですよ命！そこら辺のデパートのセールで購入したブランドモノのネクタイと違うんだからね！そもそも顔も見えてない時点で信じるわけないでしょ！さっきから姿の一つも見せないで初対面の人に失礼だと思わないの？」

余談であるがネクタイを引き合いに出したのは先日父の誕生日に母が某ブランドのネクタイをプレゼントしていたからである。そのネクタイをそれは喜んでここぞと言う日に身につけている父に向かって、一本数万もするそれが実はセール品で定価の半分以下で仕入れた品物であると言えなかった。墓場までもっていくつもりなのはささやかな娘心である。問題は気持である。値段ではない。真心はプライスレスだ。

声からは真心など一切感じられない。初対面で気持がどうのだからなんて求める方がどうかしているが、そんな奴にネクタイはおるか命なんて捧げるのは真つ平御免である。菜摘は我ながら正論を言っているな、とちよっぴり自分自身を褒め称えた。なけなしの強がりでは

あるが。

「……………ネクタイ？」

え、今の話からなんでネクタイ？声の主が固まるのと同時に菜摘の思考も固まった。

まずい。なんかテンションが180度別の方向に滑った気がした。いつも友人を叱りつけるときのテンションだった気がする。これから命奪われるか否かの状況ではない。わたし空気読めと心底思った。

相手の沈黙が痛い。もしかしなくても怒ってしまったのだろうか？そもそもわたしは誰と話していたのだろうか、相手はここにいるのだろうか。ああ、さっきから疑問ばかりだ、と心の中でため息をつきながら沈黙が破られるのを待った。

どの位待っただろう、時間にして数十秒に満たないのかもしれないがこの状況では何十分にも感じた。

「あははははは！」

突然、先程までの何処か人を食ったような含み笑いとは違い、心の底からおかしくて仕方ない、というような笑い声が響き渡った。もし姿が見えたら腹を押さえているかもしれない。

「お前面白いな！見かけによらずいい神経してるよ！」

見かけによらずってことはやはり向こうにはこっちの姿が見えていたのだ、しかもさっきから相手の態度にはいい加減苛々してくる。

初対面でこんなに笑われるなんて初めてだ。ていうか失礼だ。それにいい神経……と言われたが、奈摘自身も普段こんな相手に意見したり言い返したりなんてしないだけに自分でも驚いている。異常な状況に陥っているからもしかして気が動転して普段潜んでいたもう一人の自分発掘とか?! そんなもの嬉しくもなんともないのだけど。

「嫌いじゃないな、寧ろ気に入った。」

笑い声が止まる。

「だがな」

今度はさっきまでの楽しそうな声と一変して、冷たいナイフのような鋭い声で

「ここに居る時点でお前に選択肢はないと思わないか？」

耳元で囁かれ、びくり、とした。いつの間に傍まで来たのだろう。気配すら感じ取れない。ただ、耳元で声がするのみだ。凍りつきそうな位冷たいけれど、反面虜になりそうなほど甘美な声。気を緩めれば何もかもどうでも良くなってしまいそう。流されてはいけな、と気休めでも再び感覚のない拳をぎゅ、と握った。

選択肢。確かにここに居る時点で既に相手に主導権を握られている。ただどうして自分はこんな所にいるのだろうか。そうして今こうして会話しているのは誰? そもそも自分はここに居るの?

さっき言われたように存在するかもしれないかなんて意味がないことなのかもしれない。現に相手は暗闇とはいえ、姿がまるで見えないのだ。再び恐ろしくなって、思わず後ずさるが、その行動もあまりに

意味がないことだと感じて、き、と前を見据えた。だけれど存在しない空間なのに後ろも前もあるのだろうか。立っている場所さえも曖昧だと考えたら、足が地面に触れる感覚もなくなり、どうやら自分は闇に漂っているのだ、と認識した。

「おいおい、それ以上闇に溶け込みすぎると戻れなくなるぜ。ほら見る、足が片方溶けかかっている。」

今度は少し離れたところから、呆れたような声がした。曰く、順応性良すぎ…と呟いている。指摘に吃驚して自分の足下を見るが、相変わらず真つ暗で何も見えなかった。足が溶ける…そのうち全部闇と同化してしまうかと考えると背筋が寒くなる。だけれど相手はどうしてこんな暗闇なのにそれが見えているのだろうか。

「どうやら時間もなさそうだな、はやく決断してもらおうか。」
「だからさっき言った通り、お断りよ。」

もうやけくそ、とばかりに答えると心底呆れたようなため息と共に「お前、自分の置かれた状況わかってないだろ…。どう見てもお前が生きるも死ぬも俺が握ってるんだぜ。」

「そっちこそ矛盾してる。わたしの命を握ってるんだったらわざわざこんな周りにくいことしてないでさっさと命だろうがなんだろうが奪っちゃえはいいいじゃない。」

「お前、変なところで鋭いな…」

ああもうめんどくせえ、と今度はまるでやる気を削がれた声。奈摘自身でも吃驚だ。人間ピンチに陥るとこんなにも冷静になれるのだろうか。こんな強気な自分はもしかして初めてかもしれない。やっぱり本当に自分革命?!だから嬉しくないってば。寧ろ脱力したい。

それにしても小さな疑問があった。

そもそも同意も求める時点でおかしな話ではないか。例えば誘拐犯は誘拐した人間に対してこんな許可を求めるようなことを一々するのだろうか。答えは否、だ。完璧に優位に立った時点でそれはまったく意味のない無駄な発言である。相手がよっほどのマゾで無い限り、了解を得ることなどありえないのだから。そして菜摘はマゾではない。

ならば他に意味があるのか、例えば菜摘の了承を得なければいけない何か事情が　　考えてもわかりっこないけれど。

言葉の端々からどうも相手は面白がっている節はひしひしと伝わってくるが。相手は無理強いするつもりもないらしく、ならばからかわれているのかも、それがどう考えても自然な結論だった。

「おい頼むから変な所で悟らないでくれ…」

相変わらず奈摘の考えが読めるのか。だとしたら乙女の頭の中を勝つ手に覗くなんて最低だ。乙女の頭の中は秘密で一杯なのだ。これ以上覗かれたら溜まらない。

「命を預けるとか、そんなこと言われても預けるわけにはいきません。それよりここから帰してよ！」

というか預けるとはどういう事なのだ。仮に同意したとして菜摘の命はどこに預けられるのだ。恐ろしすぎる。

「帰ったら後悔するかもしれないぜ。」

「それでも貴方に大切な命を預けるよりまし！」

まだ自分の手元にあるほうが幾分か安心…な筈である。

「……………これ以上何言っても無理そうだな。」

そう言っつて案外あっさり引き下がったことに些か驚きつつ

「お望み通り帰してやるよ。だがな、どうなつてもしらないぜ。今のお前にはわからないかもしれないが、断つたことをいつか絶対後悔するだろう。といつてもこっちも簡単に諦める気はないがな。」

俺の中ではお前の魂は俺のものつて決定事項なの。と嗤った。

もしかして厄介な人に目を付けられたのだろうか。意味深な言葉が段々と遠のいていくのを感じながら

「そうそう、最後に良いことを一つ教えておいてやるぜ。」

お前……………

「

意識が途絶えた。

第2話

世界はこんなにも美しいのだということ、君は知っていたの？

チチチチチ。初めに心地よい鳥のさえずりが聞こえた。自分がいた場所 都会といっても差し支えないそれなりに栄えた街に住む菜摘には聞き慣れないそれ。酷く心地の良いその鳴き声に、再び微睡みかける。頬に当たる風も心地良く、新鮮で、温かい。都会の喧騒などまるで感じさせないこの場所はとても落ち着く。

「おい。」

ああ誰かが呼んでいる。起きなくては。重い瞼をそろそろと開ける。たったそれだけの行為がこんなに億劫だと感じたことがあっただろうか。せつかくの至福の時間に水を差されたような、ちょっと腹立たしい気分。

「おはよう。」

少女は的はずれな言葉を紡ぐ。どうやらまだ寝ぼけているらしい。どの位寝ていたのかなとぼんやり思う。頭が少し痛んだ。どうやら

何も無い地面に寝ていたらしい。体が地面の固さと、ほんのりとした温かさを感じた。

頭がまだ微睡みたいと主張するけれど、どうにか振り払い重い瞼を開けると、まず目の前に広がったのが、新緑の木々。それが菜摘の周りを所狭しと並んでいた。梢の隙間から漏れる温かい日の光が地を照らし、それが開いたばかりの目には眩しく、思わず目を細めた。横たわる地面はそんな光の恩恵を受けた草々が茂り、少女の体のクツシヨンになっていた。

ここは、何処かの森なのか。それも深い、人の手の加わっていない
「おはよう」

思いがけず返答があったことに驚いた。それは人の声に他ならない。なんだ、人もいる森なのか、なんて思いながら声のした方にそろそろと顔を向けた。

「あれ？ここ・・・は？」

勢いよく体を起こしたら頭が鈍器で殴られたように痛んだ。眉を顰めた険しい顔そのままに視線を彷徨わせれば、ぴたりと固まった。なんだこれ。どうゆうこと？視界に入った眩しいそれに今度は眉を顰めた。

「もしかして今度こそ、死後の世界？」

ああ、やはり死んでしまったのか、と思った。
目の前に、位置的に菜摘を見下ろす形で佇む人。は、人、で括るにはおこがましい雰囲気を持った人物だった。まるで、そう絵画から出てきたような、美術館で何度か見たことがある、美しい作品の

数々の中にあっても頷ける。髪は月に染まったような銀糸が、日の光にサラサラと溶け、まるで太陽の粒を嵌めたような美しい金の瞳が少女を捉えていた。顔立ちは彫刻のように整っており、菜摘のよく知る日本人のものとは全く違って、ここは外国なのだろうか。服装も全く見たことがない。外国と言っても菜摘の知る限りの国の服装のどれとも当てはまらなかった。でもそれはすらり、とモデルのように伸びた肢体に良く似合っていた。性別はどうやら男、女性のようなしなやかさはなく、細いながらもそれなりに鍛え上げられているであろう、でもまだどこか発展途上な感じの青年と言うにはどこか幼さの残る顔立ちだった。もしかしたら菜摘と同じくらいの年齢なのかもしれない。今までこんなに綺麗な人は見たことがなかった。それはもしかしたら菜摘が狭い世界でしか生きていかなかったけかもしれないけれど。

「うそ、天使…？」

もしその人の背中に純白の羽根が生えていたら、それは疑問系でなかったはずだ。

ああ神様ありがとう、死後のお迎えがこんな美しい人なんて。だけれどちょっぴりわたしにはには眩しすぎます。

菜摘は未だ見ぬ神の存在に心の中で十字を切った。そして自分は実はクリスチャン志望だったのだなと無信仰歴17年にして気が付いた。気が付いたところでもう意味もないことだけだ。

「悪いけど、ここは死後の世界でも生前の世界でもないよ。」

おまけに天使でも悪魔でもない、と言っ。

「え？」

天使だと思っていた人物は、未だ腰が抜けたように座り込む菜摘を、宝石のような蒼い空のような瞳で見下ろしていた。死後の世界でない？ならばここは何処なのだろう。菜摘の知る限り、こんな場所は知らない。今まで街にいたのだから突然そこが森に変わるだなんてことあるのだろうか。

「まあこうやって、ここに無防備に寝ているんだったら、そのうちそうなるかも知れないけど。」

「え、何？」

慌てて立ち上がろうとすると、頭がぐらりと傾げた。体の節々も痛む。やっぱりこんな所に寝ていたからだ。寝ていた？何で自分はこんなところに寝ていたのだろう？寝起きの頭で状況を把握するだけの冷静な判断を欠いていたとしても。この状況は遥かに菜摘の許容範囲をオーバーしていた。

「あ、夢か」

「いい度胸だよな」

再度元の地に沈みかけた頭をがしり、と掴まれた。誰に？勿論目の前の少年にである。無論その手に一切の遠慮はなく思いつきり驚掴みだ。意外に手大きいな、と思ったのも一瞬の事

「いったたたたたたごめんなさい夢じゃないですこの痛みは夢ではありえないです！お願いはーなーしてー！」

頭の中で菜摘の頭がリンゴのようにくしゃりと握り潰される様を想像して、菜摘は恐怖を覚えた。手でリンゴ潰す人って凄くない？というか痛い痛い痛い！この細腕に一体どれだけの力が秘められてい

るといふのか。ようやく解放された時には寝起きの立ちくらみ以外の痛みでぐらぐらした。

初対面の女の子なのだ、手加減くらいしてほしい。その言葉は少年の目力によってあっさりと黙殺された。

「まさか俺を無視するなんてね」

「う、ごめんなさい…」

夢でこんなリアルな痛みあるわけない。菜摘は身をもって現実であることを確認させられた。

未だ痛む頭をさすりながら、さりげなく涼しい顔をして容赦のない少年と距離をとってみる。

(なにこの人、綺麗だけど怖い・・・)

「で、君は一体こんなところで何をしているんだ？」

それはまるで少女を非難するような口調。確かにこんなところに無防備に寝ていたら誰だって怪しむだろう。自分が少年の立場なら声をかけるどころか近づいたかどうかすら怪しい状況だと思う。

「わたしは一体こんなところで何しているんでしょうね？」

そう言えば顔立ちも服装も何もかもが違うのにどうやら言葉は通じるらしいことに一応安堵した。

目の前の少年はそんな菜摘の様子を見て顔を顰めた。美形なのに眉に皺を寄せるなんて勿体ない。

いや悩ましげな表情もまたアリかもなどと不謹慎な事を思う。

「…昼寝？」

なんてまさかそんなわけないよね、と愛想笑いを浮かべてみたら呆れたようにため息をつかれた。菜摘だってため息をつきたいのに。とんだ不審者になってしまったのだから。

「あの、一つ質問させて頂いても？」

「何？」

こういう時に会おう人物って親切で優しい人で、可哀相な女の子はその真摯で暖かな彼の優しさに胸きゅん恋愛フラグへ突入っていうのがセオリーなのでは。何この人優しくない、エコじゃない。質問する前から心が折れそうってどういうこと。

「ここは日本ですか？」

問いに暫く返答はなかった。じつと何かを考えこむ彼の反応をじつと待った。

寝起きも合わさって我ながら酷い顔で答えを伺った自覚がある。縋り付くのは何。縋り付きたくてもしょうがないのは何。答えを聞いたい、聞きたくない。知りたいのは真実だけで、その真実が今は恐ろしくてしょうがない。泣きたい。でも泣くのは今じゃない。触れた地は自分の住み慣れた日本のはずなんだ。けれど都会育ちの菜摘はこんな森は知らない。質問するまでもなく当たり前前の事なのに体に触れる風は菜摘を拒絶するように冷たかった。

「ニホン？そんな名前聞いた事ないな。」

果たして、その答えは菜摘の求めている答えではなかった。

形の良い唇から発せられた言葉に最早脱力するしかない。

ただ脱力、その言葉に尽きる。首を傾けて考える様子の少年を見る

と、嘘ではないらしい。

たった今まで日本に居たはず。拉致？いつのまにか外国に来てしまったらしい…、と思うにもおかしい。目が覚めたら外国?!それでも十分におかしい。犯罪臭が香ばしい大事件の幕開けだ。しかしこれはそんな次元の問題ではない気がする。第一余程の発展途上の国でない限り、日本を知らない国はそうないのではないか?決して自惚れているわけではないが、自分の母国である日本はそれなりに知名度はあるはず。まあ目の前の人物が余程世間から疎いのだとしたら話は別。何せこれだけ現実離れした容姿で、こんな森の中を彷徨っているのだから。

(え?でもこの人日本語喋ってるよね?だって言葉通じてるし)

ああなんだか最悪な展開が待っている気がする。それも王道な。このまま真実を問いつめるべきか。現実から目を背けても良い方向に転ばないということとはわかりきっていたので、覚悟を決めるべきなのだろう。

「じゃあここは何処なんですか?」

「アシエスタのある森。」

「とある森って……。」

アシエスタだなんて地名も国も聞いた事がなかった。菜摘は世界地理はどちらかと言えば得意な方だ。本当にどちらかと言えば、の程度だが。あてになるんだかならないんだかな知識を総動員してもやはり聞いた事がないその響き。

「言ったってどうせ君にはわからないだろう?」

「うっ」

「何を失礼な」と言い返したいところだがその通りで、どうせアシエスタが何処なのかもわからない。凶星を突かれて菜摘は俯いた。なんでだろう心がくじけそうなのだ。初対面にも関わらずこの少年の愛想もなく随分つつけんどんな態度に、どうして少しでも天使だなんて思ってしまったのだらうか、と少し後悔し始めている。

「わたし、この国の人間じゃないみたい。」

「そうだろうね、見ればわかる。」

ちらり、と少女の姿を見る。確かに容姿も、服装もまるで違うから、当たり前のように頷かれた。彼の容姿からしてここは西欧あたりだろうか。書物とかで見たことがある不思議な様相。でもそれは菜摘の時代からかなり遡った時代のそれに似ているような。少なくともこんな格好で日本を歩き回ったら浮く。それどころか白い目で見られる。それを照れもせずにとってのけているとすればかなりの勇者である。

「あなた頭だいじょうぶ？」それって普通じゃない、そう言いたいでも今この状況でどう考えても普通ではないのは彼ではなく菜摘であると自身で理解していた。

嫌な考えが再び頭の中を掠めた。

常識の範ちゆうではない、でも少し前から今この状況が既に普段少女が考える常識から逸していた。

「……………それどころか、もしかしたらこの世界の人間じゃないみたい。」

言葉にした途端、ぽっかりと、心に穴が開いた気がした。

その穴を埋める術を知らなくて、縊るように目の前の人物を見上げた。

彼は日本を知らない。でも言葉は通じる。ここが全く違う世界だと
言う確証はない。寧ろありえない話だ。だけどあの出来事が夢でな
く実際に起こったことでなかったら？この不可解な状況、加えてあ
の時の出来事　　確かにあの声は「戻してやる」と言った筈だ。

だから元の世界に戻ったはずだと思っただが、何しろ相手がちゃんと
約束を守るかどうか。初対面であれだけ変な事を言う奴だ、素直に
信じる方が馬鹿なのかもしれない。菜摘自身、異なる世界が存在す
るなんて馬鹿げたおとぎ話、と思っていながらも。なんて馬鹿なこ
とを言っているのだろう、と客観的に思いながらも。だけどこれは
何かの予感。

直感だった。菜摘の中の何かが、警報を鳴らしている。ここはどこ
か、何かが違う、と。

口にした言葉とは裏腹に心の中では祈った。

どうか、この答えを否定して。笑って、一蹴して欲しい。

「ああ、そうなんだ。」

「……………え？」

それは期待していたいくつかの答えと全て異なっていて。

どう転んでも鼻で嗤うとか視線で蔑むとかそんな感じの、痛いもの
を見るように見られるのだと思っていた。

だというのに。

一世一代の告白をあまりにあっさりと返され、逆に吃驚してしまっ
た。変に肩透かしを喰らったみたいだ。馬鹿みたいに口を開けて呆
けてしまう。

もしかして、この世界ではわたしみたいな人間はめずらしくないの
だろうか、と混乱する頭で考えた。

「えっと……？信じてくれるんですか？」

「信じるも信じないも……そんな事言う人間は大して珍しくないからね。まあ最も俺は初めて会ったけど。」

ああ、そうなんだやっぱり珍しくないのか、他にも仲間がいるらしい情報を聞き、少し安堵する。

状況は良くないのに自分と似たような境遇の人がいるというだけで同族意識が勝つ手に芽生えて安心するなんて、やはり人間は群れたがる動物だ。特に日本人は群れてないと安心出来ない人種。こんな時に自分の日本人としての性質をあらためて認識させられるなんて皮肉な話。

少年は言葉を続ける。

「まあもし俺が君みたいな奴にあつたら例外なくこう言っね。」

『精神科に行け』」

「……え？」

今、この少年はなんと言っただろうか。

菜摘は目を瞬かせて目の前の人を凝視した。

「信じてない？」

サワサワと風が吹き、木の葉が音を奏でた。それはまるで少女自身の心のざわめきのように。

なんだ。

やはり、これが当然の反応なのだ。

ショックはあるが、他人事のように感じた。

「この状況から判断して分かることはある。それは君が言ったことが真実か否かははっきり言ってどうでもいい。君は自殺志願者だろう？」

その想定外の言葉に目を瞠った。自殺？だれが？どうして。彼の『君』という単語に当てはまる人物はこの森には自分しかいない、と認識する。

「あの、意味がわかりません！なんでいきなりそんな事言われなきゃいけないんですか？」

はあ、と徐にため息をつかれる。

「君はそんな丸腰で森に入ったらどうなるかわかって言ってるのか？加えて、無防備にも寝るだなんていう行為。これはどう考えても死にたいとしか思えないだろう。それに……。」

この森には熊とか狼だとか猛獣が出るのだろうか、だとしたら確かに少年の言い分も頷ける。

言葉を濁した少年はじつと少女を見つめ、何かを言いたそうに口を開くが、やがて「なんでもない」と首を振った。

「死にたいなら止めないが、人の迷惑はかけないでくれないかな？こんなところで死なれて腐られて俺も良い気分はしないからな。」

ああ腐る前に獣に食べられるだろうな、この辺りは獰猛な獣が多いし君なんか襲われたら一溜まりもないんじゃない、などととんでもない事まで言う始末。獣に襲われる自分を思わず想像してぞっとし

た。悲劇だ。悪夢だ。

「……………」

この少年は使う言葉を間違えてる気がする。仮に目の前に死にたい人がいたとする。止めるだろう普通ならば。形だけでもいいから、人として止めて欲しい。

「わたし、死にたいなんて思っただけだ。」

そしてこんな知らない所で腐るのも嫌。食べられるのももつと嫌。ああでもやはり信じてもらえるわけがなかった、と再び脱力する。普通に考えて真実味の薄い話だから当然の反応の筈だが、最初の印象が「天使」だっただけにその落胆は大きい。天使はこの状況を助けてくれる、と何処かで身勝手な事を考えていたせいだ。勝つ手に自分の理想を相手に求め、それを押しつけていただけに過ぎない。本当は天使どころか悪魔じゃないか。綺麗な薔薇には刺があるとは良く言ったもの。

「あ、そう。そうならそうでいいけど。」

どっちにしる俺には関係ないしな。

またもやあっさり返される。「じゃあ」と呆然とする菜摘をそのままに踵を返した。

「へ？」

（だからくどいけどさ、こう言う時の第一発見者の設定って、「なんて可哀相な娘、僕に着いておいでなんだ立ってないのかい？じゃあ僕が…」とか言ってお姫様だっこ白馬に揺られて綺麗なお城にご案

内！じゃないのー！）

夢見る少女菜摘、そして見た目王子の癖に世の中甘くない。寧ろ本物に悪魔だ！少年がちょっと立ち話をしただけ、とばかりに背中を向けてさっさと歩き出すのを慌てて引き留める。

「ちよ、ちよつと、何処に行くんですか？」

「何処つて帰るんだけど？まだ何か用があるの？」

「帰るの?!」

当たり前のように返された。逆に聞いた菜摘がおかしいような。ぽかん、思わずだらしなく口が開く。きつと長時間こんなところで寝てしまったせいで日射病にでもやられてしまったのだ。深呼吸をする。

こんなに美味しい空気を吸うのは初めてかもしれない。呼び止めたことに対して迷惑そうな少年に改めて向き直る。『ちよつと何急いでるんだけど』目で訴えられるが、それこそ間違いだ、ちよつと急いでる人間がこんな何にもない森にいること自体おかしいもの。

「い、今の話聞いてました?!普通、この状況で帰ります?もつと助けてあげよう、とか、百歩譲って!精神病院を紹介するとか…」

紡ぐ言葉が段々と尻すぼみになっていく。あまりにも必死な自分を恥ずかしく思いながらも。けれども、必死にならざるを得ない状況とはこういう時を言うのではないか。

「病院?こんな森の中に病院があるとても?」

しかし、少年必死な菜摘の為に道を説明する気も、自ら森を出て案内する気もないらしかった。

酷く面倒くさそうな声が返ってきた。

「病院は例え！とにかく此処で見捨てるなんて酷いよ！」

「じゃあ俺にどうしろと？」

「じゃあ貴方はどうするつもりでわたしに声をかけたのよ！」

「……さっき言っただろう、こんな所で自殺されたら迷惑だったから。」

もういいだろ、と再び歩きだそうとする。

「ちよ、良くなー！！！」

慌てて少年の服を引っ張って引き留めると、明らかに不機嫌な目に睨まれる。服が伸びるとかそんなの関係ない！菜摘のその勢いに一瞬飲まれかけた少年。動きが一瞬だけ止まった。

「なんなんだ死ぬ気ないんだろう？もういいだろう？だったら帰ればいいじゃないか。」

だから離してくれ。袖を引っ張る腕を無理矢理振り払わされそうになつて必死に抵抗した。

帰るところ。今までは何でもなかったその言葉が今は酷く遠いものに感じる。

「だから帰るところがないんだってば！」

「ないわけないだろう、だったら君は何処から沸いてきたっていうんだ！」

「わ、沸いた？」

人をどこぞのボウフラのように。この人はどうやらつくづく口が悪い。顔はいいのに。

それでも、菜摘はここで1人取り残されるわけにはいかなかった。お願いします、そう言っ頭を下げる。

「気付いたら、いたの、ここに。だから元の場所への帰り方もわからないし、ここが何処かも全くわからない。」

知らないということはこんなにも、心細いということ。知らなかった。

この世界では菜摘という存在自体も、わからないものなのだろう。誰も知らない、誰も菜摘のことを知らない世界。

それは、なんて

「お願い、置いていかないで。信じてくれなくても、わたしにはもう帰る場所がないの」

本当にこの機会を逃したら、どうなるかわからない。ここが地球なのかどこなのか以前に、この森、というものをわかっていないからさっきほのめかされたように、猛獣がいるとしたら、言われたように丸腰の少女には助かる術がない。そしてこの森がどのような構造になっているかわからない。自然に対しての全く知識のない人間には命取りだ。仮に森を脱出出来たとしても周りに街がなければ野垂れ死ぬだろう。

「もし死んだら確実に貴方のせい。恨んでやる。末代まで崇めてやる」

「……………崇るって君ね…」

最早お願い、と言うより脅迫じみている…、言った本人も思う。後できつと後悔するだろう。だけど今はなりふり構っている場合ではなくて。

少年はしばらく、下げられた菜摘の頭をじっと見つめた。少年の手が緩み、大きなため息を一つつくと

「わかった……。俺も鬼じゃないからね。付いてくるなり好きすればいいよ。」

「あ、ありがとうございます！」

頭を上げると、もう少年は背を向けて歩き出していた。その背中からは感情は何えない。

けれども、拒絶の意思が見えないのを確認すると、菜摘は安堵した。途端に少しだけこの世界に受け入れられた気がして、踏みしめた地に温かい熱を感じる。

「わたし菜摘っていいいます。あなたの名前は？」

暫くの沈黙のあと、ぼそり、と背中越しに返ってきた。

「……………セス。」

第3話

あなたの瞳が海のように蒼いことも、遠くの空の雲が白いことも、知ってるつもりだった

「ねえセスはここに一人で住んでいるの？」

森で偶然出会った少年、セスについていくと、深い深い森の奥にぽつり、と小さな家が一軒建っていた。

まるで人目を憚るように、木々の合間の少し開けた敷地にひっそりと佇むその家はまるでおとぎ話に出てきそうな不思議な空間で、一目見ただけで気に入った。

菜摘は昔からそうだった類の話が大好きで良く想像を膨らませては、夢見る乙女のように目をキラキラと輝かせて友人に話して聞かせたりしていた。それも大分昔の話だけれど。

今ではそんな話をすると友人に呆れられるのでめっきりしなくなってきた。それでも時々空想に耽っている菜摘の事をよく知る友人は菜摘の事を今じゃ希少価値の夢見る乙女。と言う。そうして必ず続けるのが『あんだこの世界に白馬に乗った王子なんているわけないんだ

からね。』だ。そんな事わかつてはいるけど想像するぐらいいいじゃない、と口を膨らませる菜摘を見て笑う仲の良かった友人は今ここにはいない。

ずっと遠くに来てしまったのだ、と急に実感が湧いて泣けてきた。そういえば泣く、という行為も最近体験していない。大分前に戦争物の切ない映画を見たつきりだった筈。まさかこんな体験で涙を流すことになるうとは。だけど横を歩く少年の前でだけは嫌だ、とぐと腹筋に力を込めて堪えた。

「そつだよ。」

菜摘の質問に短く答える少年。最初セスさん、と呼んだら、少し嫌な顔をされて「セスでいいよ。」と言われたので、ついでに敬語も辞めてみた。それに対してに何も言われなかった。特に、嫌な顔もされなかったから別にいいらしい。

この家に住む。それはどれだけ素敵な事だろう。でも。

「寂しくないの?」

「寂しい?どうして?」

逆にうるさい人間がなくて良い、と言う。それは菜摘に対しても暗に騒ぐな静かに大人しくしていると云っているのだろうか、と勘ぐってみるが少年は特に何も考えている様子がないので思い過ぎらしい。

少なくとも菜摘ならこんな森の中に一人、と想像するだけで怖くなる。

さつきセスが言ったようにこの森には怖い生き物がいるとしたら、一人で対処なんて出来ない。害のない鳥や小動物がいるのは楽しい。都会で生きてきた菜摘にとっては全てが新鮮でわくわくした。

けれど彼らは話さない。話す相手がいないというのが何よりも辛い気がした。でも目の前の少年はまったく寂しくないのだという。そもそもそれが嫌ならこんな所に住まないだろう。彼は孤独に慣れた人間なのだ。気が付けば何時でも身近に少ないとはいえ友人がいて孤独なんて感じたことのない菜摘にはそれがどれだけ悲しいことなのなのかはわからないけど、こんなにキラキラと周りを惹き付けて止まないだろうに勿体ない。しかしそんな彼だからこそ平凡な菜摘には想像もつかないような苦勞があるのかもしれない。そう考え、これ以上深くこの件に首を突っ込むのは止めることにした。

「この家はとっても素敵ね。」

何はともあれ菜摘の理想を具現化したような森の家。屋根に煙突がしっかりと付いているのを確認して、満足そうに頷いた。彼女の仲で煙突は必需品。サンタクロースだって煙突から入ってくるんじゃないから。あの煙突から煙がモクモクと飛び出すのを想像すると自然に笑みが零れた。そんな菜摘を一瞬だけ怪訝そうに見て、セスは家の中に入った。

家の生活は現代人の菜摘にとってかなり原始的なものだった。電機はもちろんない。料理に使う火だって手作業だし、日が落ちた後は燭台に油を注ぐ。こんな体験は小学生の頃に一度行ったキャンプ以

来だ。暖をとるのもきつとあの暖炉に薪をくべるのだろう。

今はどうやら夏らしく、外は暑い位だったが室内はこんな山奥にしてはめずらしく構造がしっかりしているのか、石造りのせいかわんやりと冷えていて冷房がなくても困らない。

大人数では座れない小さめの木製テーブルに向かいあつて座り、簡単な食事をする。何も言わなくても菜摘にも食事を出してくれるというところはここにいいという事なのだろうか、セスの顔を窺ったけれど、あまり感情を表に出さないセスの顔を窺ったところで無謀なようで、気にせず食事を頂くことにした。

目の前に出されたのは食べ慣れた人工添加物だらけの食事とはかけ離れたもの。パンやチーズ、豆のスープと質素な筈なのにそれが酷く美味しかった。素材の味を活かした素朴な味は、菜摘の心を温めた。突然慣れない環境に遭遇して頭も体力も思ったより使って空腹だったのかもしれないけれど。見た目も差ほど違いはなく、敢えて言うなら味が微妙に違うこと位だろうか。それもカルチャーショックを受ける程ではなくすんなりと口に合う。

「ね、これなに」

「アベナ」

差したのはパンらしきもの。色形はフランスパンそっくり、味はちよっぴり塩気が利いていて外はぱりつと中はふんわり柔らかい。バターのようなものを塗って、その上に赤いジャムをのせて食べる。

「じゃ、これは？」

「チエチのプロド」

怪しい薄いピンクのスープに入ったこれまた奇抜な色をした紫色の豆のようなもの。一瞬口に入れるのを躊躇ったが、セスが平気な顔で口に入れたので恐る恐るスプーンを運んだら、これがまた美味し

い。甘く煮た小豆のような味で色はともかく菜摘はすっかり気に入ってしまった。豆がチエチでスープの事をブロード？うむ、難しい。この美味しさに気を奪われて覚えていられる自信がない。

「じゃ、これ」

「……カチオだろ。」

「さつきから君は静かに食事も出来ないのかな？」

最後にチーズらしきものを差したところで額に青筋が浮いたセスの冷え冷えとした視線を浴びた。いいじゃないか、何もかもが初めての体験なのだから、でも少しはしゃぎ過ぎたか。それにしても美形が睨みを利かせると怖い。

それから黙って食事を終え、その後もこれといった会話をする事なく、その日は早めに床についた。小さいなりに、余っている部屋があつたらしくそこをあてがわれる。しばらく使われていなかったらうその部屋は生活感があまりなく、窓の下にベッド、その横に小さな机と椅子、使われている様子のない筆筒があるだけだった。ただそれなりに掃除は行き届いているのか、蜘蛛の巣に埃まみれという事態は免れていた。定期的に窓を開けているのだらう、空気も新鮮だ。

「困ったなあ。」

これからどうしよう、どうしたら元の世界に戻れるだろうか。ぼすん、とベッドに倒れ込むと、埃が舞った。

う、と息を止めて慌てて窓を開ける。どうやら掃除も布団まで行き届いていないらしい。明日干そう。それから掃除もして服も一着しかないからセスに相談してみよう、と考える。

「あ。」

さっきまでどうしようとか思っていたくせに案外あっさりこの状況に順応してきている自分に気が付いておかしくなった。不安な気持ちも一人ではない、性格に難有りだがセスという存在が薄れさせてくれたようだ。この埃臭いけれど暖かいベッドも温かい食事も与えてくれたセスには感謝しきれない。何より彼の存在が大きな安堵を与えてくれる。知らない世界に一人きり、と考えるとぞっとする。あの森で今頃ぼつんと彷徨っていたら　今頃獣の餌になっていたかも。東京育ちの自分には考えられないことだ。自分以外に誰もいない世界。知らない森に丸腰で。地図も土地勘もなく、着の身着のまま。これじゃ確かに自殺志願者だ。悔しいが彼の見解は激しく正しい。でももう少し言葉をオブラートに包むべきだ。年頃の女の子はナイーブなのだ。

セスはいつまで自分を置いてくれるだろうか。元の世界にいつ戻れるかもわからない。とにかく夢の中のヤツを見つけてぶん殴って、ぶん殴って、話はそれからだ。ヤツと会う手がかりすらないこの状況でそれは容易なことではない。

本当に戻れるのだろうか。

セスのあの面倒臭そうな表情を思い出すと、金も常識も何もない自分があっさりと放り捨てられる様子が目に浮かぶようでぞっとした。目下の悩みの種になりそう。

「だぁーもうお手上げ！」

直ぐ側の窓から外を覗くと、あの時と同じ闇が広がっていた。違うのは闇の中に点在する星々の光。悩んだり難しいことを考えるのは性に合わない。普段から楽天的だ

った菜摘はこれからのことはとりあえず明日考えよう、と瞳を閉じた。相変わらず埃っぽい布団が眠りを妨げたが、それも最初だけで、数分もすれば小さな寝息が室内に響いた。

昼間は賑やかな森も、夜になれば生き物達は眠りに落ち、静まりかえる。時々遠くで夜行性の獰猛な獣の鳴き声が聞こえるが、その日は静かな闇だけが辺りを支配していた。時々木の葉が風に擦れてさわさわと鳴った。

その闇に一つ、灯りをともし、いつものように古くくたびれた書物を手に、時々はらり、とページをめくる音が室内に響いた。時々風で灯りが揺れる。ふいに、ページをめくる音が止まった。

「まいったな。」

先程から本の内容が全く頭に入ってこない。同じページを行ったりきたり、普段の自分らしくない。とにかく参っているのは今日出会った、同じ屋根の下でおそらくはもう寝ているだろう少女のことだ。ナツと名乗った少女は聞いたことのない名前で奇抜な恰好をしてい

た。

何となく気晴らしに出かけた散歩で偶然見かけた。柄にもなく驚いて声をかけてしまったのが間違いだっただ。でも丸腰で殺して下さいとばかりに無防備に寝ているのが悪い。

彼には珍しい親切心とちよつとした好奇心が沸いたのだ。普段の自分には考えられないことだ。さらに考えられないことはその少女を自分の住処に連れてきたこと。脅されたこともあるが、突っぱねることも出来た。そのまま少女を見殺しにすることもできたはず。

少女は『別の世界から来た』と言った。それを鵜呑みしているわけではないが、それが本当だとしたら厄介なことだ。時々狂った人間がそんなことを口走ったりするが、少女は別に狂っているわけでも、死にたいわけでもないなんてちよつと観察すればすぐに察しがついた。

さらに問題なのはそれが事実だった場合だ。もしそうだとしたら、彼女は这个世界では生まれたばかりの赤子同然、右も左もわからないのを誰が面倒をみるのだろう。自分？冗談じゃない、そんな面倒なこと、誰が出来るか。そもそもここに来たのだって、煩わしいこと全てから逃れたいからだ。それなのにこんな厄介事を自ら引き込んでしまつたなんて。

それに少女が言った通りだったら、それどころじゃ済まされない。

「面倒だな。」

結局行き着く結論はそこだ。

少女を拾ったことで、もしかしたら色々なことが狂い始めているのかもしれない。いや、もしかしたら動き始めたのかもしれない。

偶然出かけて、偶然拾ったことも、偶然ではなく、運命　さだめ
られたこと

一向に進まない読書を諦め、ぱたり、と机に置いた。その反動で、燭台の炎がゆらゆらと揺れ、セスはそれをじっと見つめた。その表情は硬い。形の良い眉が寄せられ、炎の光で彼の耳のピアスがきらり、と光った。

問題は山積みだ。普段は悩む、という行為すら嫌煙する彼が、こんなに悩まされることになるなんて、彼を知る人物達が聞いたらどんな反応するだろうか。きっと大笑いされるに決まっている。そして少女を渋々ながらも連れてきた自分の行為もその対象だろう。

「まあ、いい。」

自分は今まで通りにすればいいだけだ。
ついに彼は現実逃避をはかった。

面倒な事は忘れる。

今の平穏だったここでの生活が崩れることだけは今はっきりとして
いることだとしても。

とりあえず、寝よう。

音もなく、灯りを消すと床についた。

彼もまた、楽天的な性格であるらしかった。

第4話

あなたのどんな一欠片さえ、尊くて愛おしいと思った

チチチ。再び鳥のさえずりが耳に届いた。

うん、と寝返りを打ってその聞き慣れないけれど心地のよい音から遠ざかるうと、耳を枕に押しつける。眩しい光から逃れる為に布団を被ると、好ましくない埃のにおいが、つんと鼻に入って、ばさりとそれを押しつけた。再び浴びることになる光の心地よさと、まだ覚醒しきっていない意識の憂鬱さとの板挟みに渋々瞳を開けると、遮るもののなくなった光が遠慮なく菜摘の瞳を襲った。

「眩しい…。」

思わず手のひらで顔を被う。そうだそう言えばベッドのすぐ横に窓があつたんだっけ。あれ、カーテンはなかったっけ。ぼんやりと手を目に当てたまま瞳を開けると自分の手のひらが光に透けるように赤くなっていた。

そのままそつと手を離すとやはりまだ眩しかったが、ようやく慣れ始めたその明るさに、目を瞬かせて、窓ではなく自分の真上、天井を見つめた。

それは見慣れない、板張りの天井。我が家より少し低いせいか木目

の天井が落ちてきそうな錯覚がした。そのままぼんやりと天井を眺めると、あの木の模様人の顔に見える。なんて遊び心が生まれてきたので視線を横にずらしてみた。やはり見慣れないテーブルに筆筭、それも全部木製のもので、ああここはやはり我が家ではないんだ、と改めて認識させられたようで少しがっかりした。

「やっぱり目が覚めたら夢だった、なんて都合のいい話ないよね。」
本当はほんの少しだけでもそうなればいいと思っていたりもしたのだが。現実には優しいけれど、大体の場合において厳しいことが多いことももちろん知っていたから。今回の場合もその例にもれるわけがなく、寧ろ今までの経験の中でも上位に入るほどの最悪の状況なのだろう。だけれどあまりショックではない自分がいるのも確かだ。その証拠にほら、こんなに爆睡してしまった。あまりに現実離れしているから未だ実感が湧かないのかもしれないが。

「とりあえず顔でも洗おう。」

風通しが良かったとはいえ、実は結構汗をかいたのだ。扉を開けると、昨日登った階段が目に入る。菜摘は二階の部屋に通されたのだ。基本的には一階は食事をしたテーブルのあるリビングとキッチンがあるだけで、寝室などは二階にあるらしい。セスの部屋も多分菜摘の部屋の隣にある扉の向こうだろうと思っている。やはり木製の廊下を歩くとときしきしと音がして、思わずそつと歩いた。

軌む階段を下りるとセスの姿はなく、室内は自分の足音が止むと静まり返っていた。隣の部屋から物音が聞こえなかったがもしかしてまだ寝ているのだろうか。だとしたらかなりの寝坊だ。あまり人のことはいえないけれど。

目を向けた窓の外は、既に太陽が高い位置にいた。

水を求めて外に出た。水道なんて便利なものはこの森の家にはなく、水差しはあったがそれでは顔を洗うことは出来ない。ならば近くに井戸か何かがあるのだろう、と思いついたからだ。あいにく唯一それを聞ける人物がいらないから、かといって彼の寝室まで出向くのも憚られるので、取り敢えず自分で探してみることにした。実は少しこの家の周りを探検してみたい、と思っていたので心が弾んだ。やっぱりこんな状況でも割とあっさりと順応しつつある自分におかしくなった。

暫く何が出るかわからないから家からあまり離れていない場所をうろつろつとしていると、水の流れる音がした。

家からそう離れていない距離に川が流れていた。キラキラと日の光を浴びて輝きを放っていて眩しくて目を細めた。こんな綺麗な透き通った川は、少なくとも菜摘の住む街にはなかった。街にある川といったら、溝と言っても差し支えないような、生活用水や工場用水の交じったゴミまで浮いて臭いのようなものばかりだったからだ。菜摘は改めて自分の住む世界がどれだけ荒んだものであったのかを否応なしに知らされて、だからこそこの場所が侵しがたい聖域のような愛しいと感じられる場所のようで、こんな些細な体験だけれどそれだけでもこの世界に来たのも意味があることのように思えてきた。

こんなにも非常事態なのにも関わらず案外楽天的な自分がおかしくなって自然に笑みが漏れた。自然の恩恵は分け隔て無く異邦人の菜摘を優しく包み込んでくれている。

何処からか流れる出る川に手を入れると、冷たかった。

相変わらず太陽は地を明るく照らし付けているけれど、その光を木々の葉が美味しそうに浴びているから、自然と木陰が出来ていて、昼間でもこの辺りは涼しいのだ。体一杯にキラキラと光る木の葉達を眩しそうに眺めてから視線を川の水面へと移す。時折鳥たちが水面を掠めていく。

ふと、水面に見慣れない銀系が移った。見慣れないけれども昨日確かに目にしたのだ。月が溶けたような銀色の髪。それはあの少年のものに他ならない。起きてきたのだろうか。そうして自分と同じように水を求めて。あの端正な顔を思い出して菜摘は振り返った。

「あれ？」

疑問と沈黙。そして次に

「えーーーーーーー?!」

「どうしたの？」

目を見開いて口をぱくぱくと動かす少女を訝しげに見た。

目の前に立つ少女は酷く動揺した様子で息を切らし、何かを訴えた
そうに手をしきり右往左往させる。

いや俺らそんな以心伝心出来る仲間じゃないし、口で言ってくれない
とわからないんだけど。とりあえず落ち着いたら。血相を変えてや
つてきた菜摘に少しばかり引きながら、取り敢えず話せる状態にな
るのを待った。

「な、なぜ？」

「何故？」

それこそ自分が今疑問に思っていることなのだが。まさか問いかけ
られるとは思ってもみなかったセスは菜摘の次の言葉を待つことに
した。

「なんでどういうわけかこ、これ！」

これ、とは？しきりに頭を指さす菜摘。自分の頭が狂っていること
をわざわざ報告にきたのだろうか。それもこんなに息を切らせて。
そういえば昨日だって森の中で寝てたし。彼女がおかしいのはあな
がち嘘でもないのかもしれない。驚く様子のないセスに痺れを切ら
した菜摘は、がし、と自分の髪を鷲掴み、セスに見せる。

「何時の間にどうしてわたしがセスと同じ髪？！お、んなじ髪の色
？」

少女の手に握られた自身の髪は、目の前の少年の髪と全く同じ色を放っていて、それを眺める少年には全く驚いた様子もなくそれがどうした、と言わんばかりの表情を浮かべていた。

「……………」

これがどうして驚かずにいられようか。水面に映る銀の髪が実は自分のものだと認識した瞬間から今に至るまで終始パニックに陥っていたというのに、セスのあまりの薄すぎる反応に再び疑問が増える。取り敢えず冷静な彼を見ていて、自分も落ち着かなくては、と冷水を浴びさせられた気分になったが、

「何、これって普通のことなの？突然変異だよ？色変わっちゃってるんだよ？しかも何故この色？！嫌がらせ？！この世界に来たシヨックで髪の毛が色素抜け落ちて全部白髪になっちゃったってこと……」

少なくとも自分の身の回りではそんな事聞いたことはない、というよりも常識の範疇ではない。白髪、といったら目の前の全く同じ色の髪をした少年に神経質そうに睨まれたので、咳払いで誤魔化した。嫌がらせとまで言ったのも水に流してもらいたい。だからお願いそんな目で見ないで、と目を反らした。昨日はあれだけ彼の髪の色を褒めたというのに、自分でもなんて自分勝手な、と思っけれど。ちよっぴり銀髪と白髪は紙一重じゃないかっていう考えが浮かんだことが気まずくて俯いた。しかし菜摘も今はセスと同じ穴の貉なのだ。

「ええ、と。昨日までは黒かった髪が急に銀色になるなんてこの世界じゃ良くあることなの？」

はあ？思いつきり顔を顰めるセス。

「普通はそんなことあり得ないだろう」

「だよねえ……」

どの世界にもそんなことはあり得ないことで、もし自分の想像以上の事がこの世界の常識だと言つのだとしたらどうしようと思つていただけに安堵するが、これでは自分がびっくり人間ではないか。珍獣扱いじゃないか。なにそれ、菜摘はちよっぴり涙が出そうになつた。

「でもさあ」

ふわり、と風が吹いてセスの髪がサラサラと流れ、やっぱり綺麗な髪だなあと思う。自分の髪もあの色と一緒になんてやはり信じられない。

「君昨日会つたときからその髪の色だつたけど。」

「は。」

びしり、と固まった。

今の言葉は聞き間違いでは？若しくはからかわれているとか？しかし見上げた少年は至って真面目な顔をしているし、菜摘の耳は健康そのものだ。多分。だとしたら本当に昨日から？どうして気がつかなかったのだろうか。まさか何もしていないのに色が変わるなんて思わないからまったく想定外なのだから気付くわけがないだろう、そんなこと意識しながら自分の髪をみたりしないし、だからいいんだ別に、否よくない気付かないわけないだろう、だって髪なんて嫌でも視界に入ってくるし、そりゃあスポーツやってる男子みたいに

短く刈つてある人ならわかるけれど菜摘の髪は肩よりちょっとあるくらいだ。それにだつてこの家鏡がないんだもの。

グルグルと考えが頭の中を駆けめぐる間、菜摘はずっとその場に立ち尽くし、それをセスが訝しげに、そして呆れたように見ていた。

呆れているのは呆けた表情のこの状況と、菜摘が今の今まで髪の変化に気付いていなかったということの両方に対して。

そういえばセスの表情って無表情か、呆れた顔しかみてないな、と思った。

「……なんかセスと同じ色だから姉弟みたいじゃない？」

言葉が見つからなくて、適当に口にしたら思いっきり嫌な顔をされた。そういえば迷惑そうな表情も良くするな、と考えを訂正した。

落ち着いて考えるとセスには銀色はとても似合うけれど典型的な日本人顔の菜摘には凄く滑稽な色だった。前々から思っていたのだが、最近の若い子は金髪だのきつい色に染める子が多いけれど、基本的に似合っていないのだ。日本人の顔に派手な金とか茶なんて似合わない。時々見かける度に酷く滑稽だと思っていた。それを昔友人達に話したら「あんた今時どんだけ古風な人間なんだよ」と笑われた。今なら胸を張つてその考えが正しかつたと言える。文字通り体を張つて証明できる。何故なら菜摘も自分の意思でないとはいえ、ついにその仲間入りしてしまったのだから。

水面に映った間抜けな顔以上にその髪の色が間抜けだったのを思い出してげっそりした。この世界にも髪を染めるという概念はあるのだろうか。あるのなら今すぐに真っ黒な元の色に染め直したいと切実に思う。

それから慌てて他に異変はないか確認してみたが、体も憎らしい事

に普段通りの脂肪の付いた見慣れた体型だったし、（どうせなら体型ももっとスリムにしてくれば良かったのに）目の色も変わらず黒くて、身長も正確にはわからないが殆ど変わりないようだった。どうして髪の色だけ変わったのかと悩んだが、生憎答えを教えてください。そんな者が周りにいなかったのでもうしようもなかった。

「まあいいや。」

「……きみはどこまでも楽天的な性格だね」

「そう言うセスは面倒臭がりだね」

考えてもわからないものはわからない、とあっさりと考えてのを止めた頃には日も傾きかけていて、お腹が鳴った。そういえば昨日の晩から何も食べていなかったのを思いだしてセスに訴えれば

「普通女が料理するものだろう……」と今時の働く女性達から非難を浴びそうな古くさい発言をしながら（実際セスにだったら喜んで料理だろうがなんだろうがする女はわんさか寄ってきそつだ）昨日と似たような食事を用意してくれた。人様のお宅で勝手に料理する方が常識なもの、それにこの世界の料理方法がわからないと菜摘は自分自身に言い聞かせてその料理を有り難く頂戴した。この間の調理実習で米を洗剤と泡立て器で洗った事実は都合よく封印することにする。

「ねえこれからどうしたらいいかな。」

昨日と同じく静かな食事を終えた後、聞いてみた。

「さあ、それは俺に聞かれても困るけど」

思った通りの言葉が返ってきて、落胆する。セスならそう思うと思った。彼は人の事に親身になって考えるような人物ではないんだろ
うな、と出会ったあの時から思っていた。

「とりあえずあんまり人前に出ない方がいいんじゃないか？」

「は？」

セスの視線を見ればどうやら髪に向けられていて、そんなに似合っ
ていないんだと少し落ち込んだ。

「やっぱ似合っていないよねえ」

「似合う？君は似合うと思ってるのか？」

似合うわけないだろ、ときっぱり言われて頂垂れた。この男はもう
少し言葉をオブラートに包むとか出来ないのか！お陰で立ち直れそ
うにない。

「セスは似合ってて羨ましいよ……」

途端セスは一瞬だけ動きを止めて、直ぐに変なものを見るような目
つきで菜摘を睨んだ。

頂垂れている菜摘にはその様子を見ることが出来なかったが。

「まあその髪以上に君のその脳天気な脳の方が心配だけど。君が人
前に出たら、阿呆が露見して周りに珍獣扱いされて困るんじゃない
かって事を言いたいね。」

「ま！なんてことを！」

「まずはこの世界の常識を身につけた方がいい。」

じゃないと自分の身を滅ぼすことになる。

それだけ言うとセスは階段を上がって自室に戻っていった。

「……自分ここにいていいってことなのかな？」

今の流れでは、一度もここを出て行けと言われなかった。彼の性格からして面倒なことには首を出さない主義だからきつと早くここを出ていくように言われると思った。迷惑ならはつきりというはずだから、何も言わないということはここに居ていいということだ。何だ案外良いところあるんだ。自分が馬鹿にされたことを棚に上げて、良い方に解釈した。

「……お風呂」

一安心したら急に色々な欲求が出てきた。服だつてこの一着しかないし。灯りの灯し方だつてわからない。セスに言われたようにまずこの事をよく知らなければいけない。悔しいけど基本的なことから何も知らないのだ。明日聞いてみよう。迷惑そうな顔をするセスを思い浮かべながら取り敢えずその日は寝ることにした。
「ごちゃごちゃ考えていたつてどうしようもないのだ。」

第5話

本当に、貴方の存在に救われたことを

「ん。」

毎日がホリデイ。定年退職を迎え、年金生活をしている年配の老人達を見て、なんて羨ましいんだろう、と思ったものだ。普段学生として学業部活諸々に時間を縛られていた菜摘としては当たり前とも言うべき思考だった。

そして今、菜摘の置かれた現状とえば。

仕事 勿論ない。いや居候の身として家の掃除等しようと思えば出来るのだが、セスに特になにも言われないのを良しとして積極的ではない。勿論簡単な事はするけれど。

勉強 勉強道具もある筈もなく（あつたとしてもしないけれど）向こうの世界の常識で推し量れるものなのか森の中に居たのではありません。こちらの学校等の環境は一切わからない。こちらも義務教育なのだろうか、菜摘と同年代の子は皆学校に通って、そして何を学んでいるのか。数学とか物理とか、英語。同じようなことを学ぶのか。セス

に問うべきなのか悩んだが、辞めた。この間セスが難しそうな顔をして読んでいる本を何となく覗いたら、理解できなかったから。理解以前の前に文字が読めない。

言葉は通じる癖にどうやら文字ばかりはどうにもならないらしい。英語とも違う、今までにみたことのない記号が並んでいた。

この世界では赤子も同然なのだと思わしに理解させられた。

教えて貰う？セスに？そんなことを言い出そうものならバツサリと「面倒臭い」と本気で切り捨てるセスの顔が浮かんでくるようだった。

そもそも菜摘自体面倒臭がりなので、その考えは一瞬にして闇に葬られたのだが。

そんな状況で読書もできる筈が無く、毎日することと言えば危なくない範囲で森に繰り出し、毎日ぼんやりと過ごす。起きて、食べて、森林浴、食べて、寝る。

これぞ毎日がホリデイ。

しかしそれも日を重ねる毎に飽きがくる。

毎日することもなくブラブラとするのは疲れるのだ。

（忙しすぎるのも嫌だけど、こうして万年プーなのも結構キツイのね。隣のじいちゃんごめん！今なら分かるわじいちゃんの気持ちがつ！）

隣人であり、菜摘が生まれたときからのつき合いである、老人が私が羨む度に見せた表情を思い出した。

『菜摘もいつかわかるさ』

そのいつか、がまさかこんな早くにくるとは思わなかったけど。高校を卒業して、大学に行って、就職して、周りと同じように時が過ぎていくことを疑わなかった。だからこの目まぐるしい毎日を取りタイアするのはまだまだ何十年も先の話だと。

それがどうだ、この年で老人顔負けの生活。

食事担当はセス。テレビも雑誌もパソコンもなく、これ以上ないという位俗世から隔離された生活。しかも自分が何処にいるのかすらわからない状況。まるで竜宮城に行った浦島太郎のような。

菜摘の竜宮城にいたお姫様もとい王子様はセスで、彼といると言葉すら忘れてしまいそうだ。会うのは食事の時くらいで、会話は殆どない。

セスと会話がないうことは、他にこの森で原語を話す者がいないということ。

話相手もない。することも無い。こんなに毎日が退屈だったなんて。

(このままだと耄碌してしまいそう…)

若しくは独り言の多い変人に。

いつか人里に戻れた時が不安になった。

そうしていつものように宛もなくブラブラと森を彷徨っていた時の事だった。

どこからとも無く視線を感じた。悪意のある視線ではない、と思う。辺りを見回してみるが特に変わった様子もなく、木々の擦れる音と、取りの囀り。

「気のせいかな。」

なんとなく視線を足下に向けた。

目に入ったのは黒い塊。

こんなのあったらどうか。

「あれ？」

そこにはいつの間にか、菜摘の足下に、可愛らしい尻尾を千切れんばかりに振った、小動物がいた。

ただの愛くるしい子犬のようだ。熊の子とかだったらどうしようとか凍りかけた心臓が平常に動き出した。

「か、かわいい！」

愛くるしい動物にしては一風変わった金の瞳をこぼれ落ちそうなほどキラキラと輝かせて菜摘を見上げている。真っ黒な美しい毛並みと瞳がなんともミステリアスだ。

触っても大丈夫だろうか。噛み付いたりしないだろうか。しゃがみ込んで頭をそつと撫でると嬉しそうに目を細めた。

久しぶりに触れる生き物の温かさに心がほんわりと癒された。太陽の光を浴びた漆黒の毛並みがサラサラと心地よい。ああ癒し、夢見心地。暫くその感触に身を委ねる。

「お前、迷子なの？」

見るところまだ生まれて間もない子犬のようだ。艶やかな毛並みとどこことなく上品そうな様子からして飼い犬だろうか？ 躡もすっかり行き届いているのか、行儀も良い。菜摘にされるがままに大人しくしている。首輪はしていない。

問いかけてみたところで答えが返ってくるわけもなく、相変わらずジッと菜摘を見つめてくる。

「お母さんとはぐれちゃったのかな？」

キウウンと鳴く。鳴き声まで愛くるしいとはな！ふにやりと自分の頬が幸せに緩むのを感じた。

それにしても言葉を理解しているのだろうか。菜摘の問いに答えるように首を傾げる子犬にはっ、として引きつった笑みを浮かべる。何かを訴えかけるような瞳。

「だ、駄目だよ、うちは……」

駄目だ、と後ずさりすると、やはり、訴えかけるような大きな瞳と目が合った。

「駄目だったら……」

子犬の切なそうな視線攻撃を受けながら、真っ先に浮かんだのはセスの顔だった。

ああ、どうして自分の想像するセスの表情は怒ってばかりなんだろう。

クウン、と一声聞こえてきた瞬間に一気に脱力した。

「で？」

戻ると待ちかまえていたかのように家の扉の前でばったりと出くわしたセスとまともにも目を合わせる事が出来ずに視線を反らす菜摘。足下にはやはり黒い物体。

セスが苛立たしげに視線をその物体に向けるが、俯いた菜摘はその視線に気付くことは出来ないけれどセスの言わんとしていることは嫌でも伝わってきた。

何か尋問を受けているような背筋の氷る気分。背中を冷たい汗が流れた。

セスの気持ち痛みほどわかるのが今はただ拷問でしかなかった。先程の威勢の良さは何処に行ったのか、菜摘の下でちょこんと行儀良く座っている。本当空気の読める子だ。耳はしょんぼりと垂れていた。菜摘にも子犬のような耳があつたら間違いなく垂れていただろう。

「この子、迷子みたいだね…」

「で？」

「いや、だから可哀そうだよね。」

「なんで」

ほらでた即答。お前には血も涙もないのかと思わず口に出しそうになるけれど、それも違う。だってセスは菜摘を見捨てないでいてくれたから。血は通っていると思う。ただ涙があるかは定かでない。

「なんか懐かれちゃったんだもん」

「君は、可哀想だからってなんでもほいほい拾ってくるのか。」

「そついうわけじゃないけどさ…。」

ねえ飼ってもいいでしょう？と恐る恐る目の前の少年の顔を窺うと、
普段の数十倍機嫌の悪そうな瞳と目が合った。そして有無を言わず

「駄目」

「…まだ何にも言っていない。」

「駄目」

そして眉間に皺を寄せたセスが再び子犬に目を向けた。そんな親の
敵を見るように睨まなくても！

「鬼！」

「何とでも言え。最近俺は君って言う大きな拾いものをしたばかり
なんだけど？そこんとこわかってる？一気に面倒事が二つに増え
るなんて冗談じゃない」

「この子お利口だし面倒かけないと思うよ。」

「は、どの口がそれを言うんだ？目下一番の面倒事の君が？随分と
説得力のない発言だよな。この世界のいろはも知らない癖に。少し
は自分で自分の世話が出来るようになってから言ってくれないか。
話にならないな。」

そう言われるとぐうの音も出なかった。

拾われ者が拾い物なんて冗談みたいな話だ実際。きしり、と心が痛
んだ。『居候の身』で『お荷物』の自分が情けない。どうしてこの
世界に来てしまったのだろう。なんでこんなに無知で何も出来ない
んだ。

「確かにわたしはセスがいないと何にも出来ない。料理だって任せ
っぱなしだし」

いや料理はしろよ、という鋭い突っ込みは流す。

「この世界のこと全く知らないし、セスに拾われてなかったら間違
いなく今頃死んでただろうし。でもこうして生きてられるのは、今
までいた世界から突然飛ばされて来て、それでもこうして悲観せず
に、わたしらしく　セスは呑気呑気って言うけど、そんな感じで
今まで通りでいられるのは。全部ゼーんぶセスのお陰だよ？突然こ
んなあり得ない環境に置かれたら普通だったら不安で不安で絶対絶
望してたもん。」

自分の存在意義すらも分からないこの世界で、正直言っただけにも出
来ないわたしがあたしでいられるのは、一人じゃないからだってわ
かったんだ。

だからわたしを拾い上げてくれたセスには本当感謝してる。」

セスは静かに菜摘の言葉に耳を傾ける。そんな二人の様子を黒い生
き物が不思議そうに眺めて

（わ、わたし今なんかとてつもなく恥ずかしい事口走った?!！セ
スのお陰で今の自分がいるとかどの口が言ったよ?! いやこの口だ
けど!！）

瞬間ふわっと顔中に熱が走る。多分耳まで真っ赤だ。自分の言葉に
赤面する事が来ようとは。なんだこの告白紛いの台詞は。なんでこ
んなに居たたまれない気分になるんだ、それもこれも言われた当の
本人が何の反応もしないからで

「それで」

（ておい放置プレイかよ！一世一代の告白をあつさり流した！この
人ドSだよ。恥ずかしいのはわたしだけか！ていうか今結構良い事
言ったと思うんだけど！それを「それで」で済ますとは…!!）
この男、本当に侮れない。1ミリたりとも表情を変えないことなく全

の感情を殺した無の表情で菜摘を見下ろす。実際菜摘の言葉は彼には全く届いていないのかもしれない、と思うとため息が出る。

「いや、だからわたしが言いたいのは、独りぼっちって凄く悲しいことだと思っただよな。」

「……その感情は俺には理解できない」

でしょうとも。会った初日に他人と接するのは面倒臭い。一人でこの森の中で籠もっている方が楽で良いと宣ったのを菜摘は今でも覚えてる。いわゆる『引き籠もり』のセス。彼が何を思っただろうのか菜摘にはわからない。あるいは本当にそう思っているのかもしれないけれど。

途端に、言い表しがたい思いが体中を駆けめぐった。でも、その感情の答えを見いだすことはできそうになくて。

そんな菜摘を相変わらず読めない表情で見下ろしてくるセスもきつと。

「それでもね、人は一人では生きていけない生き物なんだよ。わたしが生き証人です。セスだって今までの人生でまったく誰にも干渉されなかったなんてことないでしょう？ 良くも悪くも誰かと関わって今のセスがいるんでしょう？」

「……。」

「じゃあ、この子は？ 親と離れてこれからどうするの？ わたしはセスに拾われたけどこの子を拾うのは誰？ これからこの子の人生に関わってあげられるのは誰？」

「その役目は別に君でなくてもいいだろう。半人前の君が背負うべきことじゃない」

「いや、まあそれ言われると……まあ、うん……そうなんだけどね」

正論突きつけて情に訴える作戦、見事に撃沈。予定通りそんなんで撃破できるほど敵は優しくない。

聞く耳を全くもたないセスに対抗するように、菜摘は子犬を抱き上げた。よし、こうなれば最終作戦決行だ。

「ね、こんなに可愛いんだよ？」

見てこの瞳を、とセスの方に向ける。すると子犬が示し合わせたかのように、クウンと鳴いた。やっぱりこの子は頭が良い。

「……………」

急に大きな瞳を向けられて、セスが少し怯んだ、ように見えた。セスも人の子だったのだ、と内心関心する。

（こんな目で見つめられたら誰だって困っちゃうよね。）
しかしそれも束の間、そんな目で見るなとばかりにセスが視線を反らした。

「面倒はわたしが見るから」

「……………」だから自分の面倒も禄に見られない君が大層な事を言っな
「う…痛い…」

だがしかしその反応も想定済みなのだ。

今度は子犬をセスの目線まで持ち上げた。ほら良く見てこの瞳を。

「こんな可愛い子犬見捨てられないよね？」

ね？と駄目押しすると、今度はセスが急に驚いて目を見開いた。

「は？」

何を言ってるんだ君は、とさっきまで寄せていた眉間の皺が何処かに吹っ飛んだ。

「かわいい……こ……いぬ？」

そして再び視線が子犬に注がれる。まるで変な物を見るように。そしてそのまま視線が菜摘まで降りた。やはり変な物を見るように。

「可愛いじゃない。」

これを可愛いと言わず何と言うのだ。

「これが可愛い子犬？…冗談じゃない。本気で言ってるの？君は」「え…うん」

思セスが菜摘と子犬を交互に奇妙な顔をして見ている。美的センスの違いだろうか。思案する表情を浮かべること暫く。

「こいつ……ああもつくそっ！」

そのうちセスは綺麗な髪をくしゃりと搔いて舌打ちをした。

「好きにしたら。とにかく俺は面倒事はご免なんだ！」

「…え？いいの?!」

「…面倒くさい。」

心底面倒臭そうに踵を返したセスに子犬ごと勢いよく抱きついた。

「ありがとセス！」

「わ！やめる兎に角そいつを俺に近づけるな！」

それが第一条件だから！と逃げるように室内へ姿を消した。セスは犬が苦手。まだ白紙に近いセスと言う人物の辞典に項目が一つ、追加された。

「君に名前つけなきゃね。て実はもう決めてるんだ！」

何？と首を傾げる子犬を自分の目線と同じ高さまで持ってきてにこり、と笑った。

「シルヴィー！君は今日からシルヴェスターだよ。」

子犬、シルヴィーは嬉しそうに尻尾を振った。

それは元の世界で菜摘が飼っていた猫の名前。目の前の子犬と同じ黒毛の猫だった。突然家に迷い込んできた境遇はこの子犬と一緒。やたらと気位の高い猫でいつも菜摘の膝の上に上品に座っていたものだ。懐かしい。猫のシルヴィーは2年前に突然姿を消してしまつて酷く悲しんだものだ。何処かで元気にやつてるといいけど。

この目の前のシルヴィーを見た瞬間真っ先に思いだした。何処か似てるのだ。猫と犬なんて根本的な所が違うけど、何か雰囲気みたいなものが。

こつん、とシルヴィーの額と自分の額を会わせて目を閉じた。

「よろしくね。」

向こうの世界とこの世界が少しだけ繋がったような気がした。

第6話

全てを知った時、優しい貴方がどんな表情をするのかだなんて考えられなかったのに

この世界での菜摘の保護者セスについて検証してみたい。

居候を始めてから早数ヶ月。数えないかけど恐らくそのくらい。最初の方は数えていたのだけど、いつの間にか忘れていた。そもそもこの世界ではどういう時間の流れなのだろう。朝起きてから、寝るまで生活のリズムが崩れることがないのであまり地球と変わらないのかもしれない。日本にいたころは分刻みで動いていたのがまるで夢のようで。ここにいると時間なんていうものはどうでも良くなってくる。

セスは朝が弱い。起きてくるのは大抵日が高くまで昇った頃。そしてすこぶる機嫌が悪い。そんなセスを待っていては食事がいつになるかわからないので、最近では朝食は自分でなんとかしている。

と言ってもパン（によく似たアベナという食べ物）をかじるくらい。

セスは基本無口。あまり表情を表に出さない、と思っていたけど、嫌悪感とか煩雑な感情は一切隠そうとしない。時々突拍子のない菜摘の発言に眉を顰めたりため息を吐いたり、意外に感情は豊かなのではないかと思う。基本的に失礼な表情しか見たことないとも言

う。
併せて極度の面倒臭がり。本の虫で、読書の時間を邪魔されるのを特に嫌う。なので、菜摘は日中は専らシルヴィと森をぶらぶらしたり、自室でぼーっとするかのどちらかである。

セスは品が良い。生まれ育った環境が上流階級なのだろうと確信していた。動作一つにしてもどこか優雅で、それはこの家に不釣り合いな気さえする。容姿にしたってとても庶民の出自には思えない端正な顔立ち。実は王子なんです、とカミングアウトされたらやっぱりね、と頷くだろう。醸し出す空気も一般人且つ平凡な菜摘には近寄りがたいものがある。素性が知れない謎のベールだらけの美少年が1人、こんな人里離れた森の奥で暮らすなんて、事件の二オイ

です！
菜摘は目の前で寝そべるシルヴィの腹を撫でながら

「考えてみればわからないことだらけだよ。見返りもない、得体の知れないわたしの世話まで文句一つ言わずに・・・まあ面倒臭そうな態度は崩さないけど・・・それでもなんだかんだで、不自由ない生活させてくれるし。」

あの落ち着きぶりでなんと19歳なのだという。菜摘と2歳しか違わないという。

菜摘はある程度の素性は包み隠さず話したが、セスは全くと言って自分のことは話さない。だからもう数ヶ月も一緒にいるというのに、

彼の情報といえば名前と年齢だけ。検証しようにも情報があまりにも少なすぎた。そして考えれば考えるほど、

「ミステリアス・・・」

「何が」

うわ、とのけぞるようにして振り返れば、寝起きの機嫌の悪そうなセスが立っていた。

「あれ、今日はいつもより早いね」

「・・・昨日思ったより読書がはかどったからね」

いつもより機嫌は良いらしい。素性はわからなくとも、細かい感情の動きくらいは見分けられるようになっていた。もしかしたらセスが故意に感情を隠すのを止めたのかもしれないけれど。自分が敏感になったのか、相手が菜摘に気を許すようになったのか判断が難しいが、どちらにせよ良い変化だと思っている。せつかく一緒に住むのだからギクシャクした関係は避けたかった。

いつものようにシルヴィの存在は綺麗に無視して台所へ消えていく後ろ姿を見て、今朝は温かい食事にありつけそうだと思った。

結論、セスは結構変わった人。

菜摘も多分変わっているから、無口で面倒臭がりなセスとの共同生活を結構気に入っている。

それは台所から流れてくるスープの優しい香に顔を綻ばせる表情を見れば明らかだった。

「ねえ、そういえばこの料理の食材達ってどうしているの？」

セスとのコミュニケーションは専ら食事中。といっても返答の有無にかかわらず一方的に菜摘が話しかける。最初は鬱陶しがられたが、最近では少しずつ返答がかえってくるようになった。

菜摘の粘り勝ちだ。なんとなくどういいう質問をすれば、どういいう訊き方をすれば答えが返ってくるのかがわかるようになったからかもしれない。

「何を急に」

確かに今更と思わないでもないが、思った通りの面倒臭そうなセスの反応に苦笑する。

「だってセスが農作業してる所とか想像できないっていうか実際見たことないし、だったらこの美味しそうな野菜達はどうしてるのになって。」

今日のメインの肉にしたってもしかやセスが狩りでもしてるのだろうか。それはまあ想像出来なくもない。弓矢を射るセスを想像してみても、白馬に乗ってる姿が浮かんできたので、笑いを堪えたら、じろりと睨まれる。

こんな深い森で食料の調達は困難な筈だ。普段のセスはいつも自室に籠もっているし、何時買物に出ているのだろう。今まで街に出かける素振りなど見たことがなかったから、もし知らないうちに出ているのなら、少し悔しい。菜摘だって街に行ってみたいのだ。

菜摘の問いに答える気がないのか、ちらり、と視線を向けたきり返答がない。いつものことなので文句を言う気もないけれど、未練がましく前の少年の様子を窺うと、珍しく何か考え込む素振りを見せられている。

「そう言えばわたしの母親もね、家庭菜園とかよく……あれ？」

言いかけて途中で言葉が詰まった。今までなんとなく感じていた違和感。不安が確かな形と成って脳裏を渦巻いて頭が真っ白になる。おかしいと思いながらも放置していた、否、意識しようとするればするほど遠のいていく違和感の正体が。

それが今　頭の端を掠めた、気がする。

「？そついえは君はあまり家族の話をしないな。」

「え？そつだつけ？」

家族　その言葉になにも感じない筈はないのに。

「家族ね、うん、家族…もちろんわたしにだつて家族くらい……」

家族構成は？何人いた？姉弟は？簡単に出てきていいはずの情報が浮かんでこなかった。そこだけぽっかり抜けたように。

「あれ？おかしいな」

目の前のセスも私以上に怪訝な顔をしているはずだ。一番忘る筈のない情報。どんな薄情な人間だつて家族構成くらい把握している。なのに、名前、人数はおるか顔すらも浮かんでこない。

家族は居たはずだ。それだけはわかる。社会に出る前の学生が誰か

の庇護下にいるのは当たり前で、そういった日常生活で不自由したことはない。それは両親が菜摘を養っていたからに他ならなくて。漠然とただ家族がいたという情報のみがあるというのはなんて気持ちの悪いことか。何よりも大切な存在だった筈である。それを簡単に忘れるものか。なのに、ここにきてから一度も意識にまったく浮かんでこなかったのは何故

「覚えていないの？」

「は」

そんなわけないでしょ、簡単に笑い飛ばせる問いだ。

なんでそんな重要なこと。顔も思い出せないなんてどうかしている。今セスとこうして食事をするように、向こうでも家族で食卓を囲むのは日常だった筈だ。大きな食卓に自分と、それから顔も見えない家族。人数さえも。何を食べた？菜摘の好物を作ってくれた母親の顔は？学校であつたたわいもない話で談笑して、賑やかな食事記憶の中ではそこで笑っているのは自分だけ。周りは靄がかかつてはつきりと思い出せない。そんな事ってない。

背筋が凍る。

「や、やだ、こんな簡単なことなのに。」

なんで思い出せない？

違和感の正体　こちらに飛ばされてからそういえば一度も寂しいと感じなかったこと。何故なら存在そのものを忘れていたから。寂しい要素を喪失していたからに他ならない。

言葉に出来ない困惑と衝撃が菜摘の心にのし掛かった。

固まる菜摘の様子をセスが無言で眺めてからため息をついた。

「一度も元の世界を恋しがる様子がなかったから、そういう人間なのかと思ってたけど、違ってたみたいだね。記憶喪失？」

「ち、違うよ、だって家族の事以外ちゃんと覚えてるもの。最初に聞いたでしょ、ここは東京ですか、って。そこがわたしの住んでたところ。そこでわたしは学生で高校に通って友達もいたし、親友と呼べる子だっていたし、飼っていた猫の名前だって、住んでいた家の住所だって全部、全部覚えてるし。なのに、」

「家族の事は思い出せない、と」

「うん…」

言って不安になる。本当には家族がいたのか、家族に愛されていたのか、もしかして…最悪のことを考えて頭を振った。

「こんな都合のいい記憶喪失あるのかな」

そこだけがぽっかりと穴が空いたように抜け落ちている。寂しい、という感情すら抜け落ちているので今までまったく気づかなかった。向こうでの生活ははつきりと覚えているのに、そこだけ写真を切り取ったように記憶に上らない。

「…最低だな、わたし」

こちらの世界ではそんな感情負を生むだけだから逆に好都合なのは、という気持すら浮かんだ事に嫌悪した。そんなことない。だってきつと大切だったはずだ。それを忘れてしまふということは何よりも耐え難いはずだ。

(わたしは、もしかして)

「君は」

セスの普段とは違う声音に俯いた顔を上げると、何時も通りの無表情で

「見たところ、育ちは悪くないらしい。顔立ちは、至って平凡だが、器量は悪くない。性格がねじ曲がっているということもないし、少し平和ボケしている嫌いもあるけど」

瞳が揺らぐ。

何がいいんだこの男は。貶したいのか褒めたいのかどっちなんだ。軽く傷つく単語が入り交じっていたのは気のせいか。

「悪くない、ということだよ。てっきり複雑な家庭環境にあったのかと思ったが違う、と思う。

「じゃなきゃこんな真っ直ぐに育たないだろう」

「へ」

セスの思わぬ言葉に頬の辺りが熱をもったのに気が付いて慌てて両手で隠した。多分、今の自分の顔赤い。

彼が褒めてくれたのは記憶によるとこれが初めて。冷静に考えると果たして褒めたのかどうか怪しい線だが、冷静じゃない菜摘には何十倍にも優しく響いた。

「どっかした？」

「べ、別に…」

慌てて俯いた。駄目だ、顔がにやけてしまう。

「今まで俺は劣悪な環境に置かれたせいで良いとは言えない道に走ってしまった人間を沢山見てきている。中には法に背くような悪に手を染めてしまった人間もね。彼らの多くは成長過程で何かしらの傷を抱えたものが多かった」

今日のセスはいつになく饒舌だ。

「つまり、人格形成の大きな影響は育った家庭環境に寄るんじゃないかってこと。呑気な君はそれなりに裕福な生活だったのではないか？学もある。教養も行き届いている。こちらの世界では珍しいことだよ」

「それはわたしの世界には義務教育という制度があったからで…」
「義務教育？何だいそれは？…まあそのことは今はいい。俺が言いたいのは、」

「うん、わかってるよ。」

セスが伝えたかったこと。普段無表情かしかめっ面しかしない彼が実は不器用なのだ気づいたのはいつからだろうか。本当は優しいってことも菜摘はとくに理解していた。いつだってさりげなく菜摘を見守ってくれていたように思う。

「君がそこまで真っ直ぐに育ったのは、家族の愛情のお陰なのではないか」セスはそう言いたいのだ。遠回しな表現が彼らしい。

「君がどんな環境で育ったかなんて見てればわかるよ」

だって君は演技が出来るほど器用な人間じゃないだろう？どんな顔してそれを言ったのは菜摘にはわからなかった。もしかしたらいつもの無表情のままかもしれないけど。俯いていたので確認出来なか

った。

「ありがとう」

ぼたり、と手元のスープに波紋が広がった。しょっぱくなくなっちゃったかな。だつてセスが悪いんだ、急にこんなこと言うから。声があまりにも温かかったから、不器用に差し出された気持があまりにも温かかったから。

うん、そうだね、こちらに来て初めての知人のセスが言うのだからそれは正しいのだろう。この世界のあらゆる知識を教えてください、が彼だから、彼の言葉は絶対で、その言葉は菜摘の世界の全てで、だから間違いないだろう。

波紋が徐々に収まるころには菜摘の心も落ち着いていた。冷静になった頭で顔も思い出せない家族の影を思い描いてみた。やはり不自然なにそこだけがぼつかりと黒く染められていた。

（忘れててごめんね、わたしはこんなに愛されて育つたのに、今はなにも覚えてないんだ。こんな親不孝のわたしを許してね）

家族が与えてくれたもの全てが今の菜摘を形成しているのだ。

セスの言っていることは統計的なものでしかなくて、全てに当てはまるものではなく、かなり無茶な理論だつてわかっている。頭の良いセスなら尚更理解しているのだろう。それでもこうして言葉にしたのは他でもない、菜摘を慰めるためだ。その優しさが嬉しかった。

「ようやく泣いたね」

「え？」

「君はこちらに来てから一度も負の感情を出さなかったらどう？いきなり知らないところに放り出されて不安に思わない方がおかしい。最初はただの脳天気かと思っていたけど。」

こちらに来て初めての涙だった。

ほんとはほんとは寂しかったのだ。

無意識に気付かないようにしていただけで。

「それにしても、おかしいな」

食事の手を止めて、考え込むように燭台をじっと見つめてセスが呟いた。何かを考え込むときに顎に手を置くのは彼の癖だった。

「特定の情報だけ一方的に記憶が抜け落ちるなんて不可解なことが何故起こる？世界を渡る事の代償なのか？それともシヨックによる記憶障害？否、もっと意図的なものを感じるけど・・・これに関しては俺の専門外だからさっぱりわからないな・・・」

思った以上に、真剣に考えてくれていることに、セスはやはり優しい人なのだと菜摘の心は温かくなる。

「1人、俺の知り合いにこの手の情報に詳しい奴がいる」

この手、とは菜摘のような異世界からの訪問者のことだという。あまり

表立ってはいないが、異世界の研究をする変わり者の知人がいるのだと言った。

「だが、あいつとは今は連絡をとることができないんだ。・・・すまない」

「え、気にしないで。セスが気に病むことじゃないよ。事実が気が

「付けただけで収穫だわ！」

あからさまに落胆するのは、涙をこぼした菜摘に対してと、自分の与り知らぬ未知の事象に対して答えを見出すことが出来なかったから。セスは根っからの学者気質なのだ。答えの出ないことがとても悔しいのだろう。そんな様子を見ると自然と気持が落ち着いてきた。

少し気分が落ち着いて心に余裕が生まれると、別の視点から不安が生まれた。菜摘は家族の事を覚えていないけど、反対に家族はどうなのだろう。もしかしたらあちらも菜摘のことを忘れてしまったのだろうか。

こちらに来る直前、菜摘は、交通事故にあって、それから死んだ

（あれ…？）

今まで忘れていたけど、菜摘は前の世界で、死んだ？

『死』

（わたし、死んだんだ）

なんで今まで忘れていたのか。じわりと汗が滲むこの手のひらは確かに生きていることを実感させるのに。心臓が早鐘を打つ音も幻ではなく、現実のもの。一方で、事故に遭った状況も思い出した。あの時暴走した大きなトラックが菜摘めがけて突っ込んできた。日常の中に突如襲いかかった非日常の悲劇。それが自分に降りかかる。だなんて誰が想像できたのだろう。ほんの数分前まで当たり前の生活を歩んでいたというのに。現に、今でも菜摘には実感が無い。トラックを避ける術のなかった菜摘の小さな体が、まるで人形のように、飛ばされたこと。あれは現実なのか。夢ではないのか。

ここにいるということはやはり死んだのだろう。菜摘の未来はそこで閉ざされたのだ。おかしいくらいあっけなく、そして突然。

こんなに冷静なのは、やはり実感がないからだ。

人が死んだらどこに行くの？ 答えは誰も知らない。まさかこんな異世界に流れ着くんだよ、だなんて誰が答えられるというのか。

そつと視線を泳がせると、いつの間にか正面のセスが食事の手を止めて、じつと菜摘を見る。というより観察をしていた。彼の目に一体どんな風に映っているのか、怪訝そうな瞳からは何も伺い知ることができないし、知るのも恐ろしいと思った。完成された彫刻のように整った顔は微動だにせず、ただ菜摘を眺める。いたたまれなくて目を伏せるとぼたり、と滴が木のテーブルに落ちた。温かかった食事はとつくに冷めていて、それ以上に菜摘の心も冷え切っていた。ただ、二人の間の蠟燭だけが微かな隙間風に流されてゆらゆらと揺れて温かい色を居間に降り注いだ。

何かをしゃべらなくては、と思う。同時に口を開くのが億劫で、セスも空っぽの言葉なんて求めていないだろう。逆に無理に口を開いたらその重みに耐えきれぬ自信も今の菜摘にはなかった。静かに、ゆったりと時間が過ぎていく。

蠟燭を眺めると、あの時の夢を唐突に思い出した。

(夢？ あれは夢だったの？)

頭を鈍器で思いっきり叩きつけたような衝撃が走った。

どうして今まで思い出すことが出来なかったのだろう。

夢の中で男が最後に残した言葉を今になって思い出した。

『そうそう、最後に良いことを一つ教えておいてやるぜ。
お前のことを前の世界で覚えてる奴はいないからな。俺がちよっ
と記憶を書き換えてやった。ははは、お前も帰るとこないのな！
戻ったとしてももう死んでるけどなあ。死んだお前の魂救いだして
やったの俺だから感謝して欲しいね』

唐突に理解した。

（わたしが死んだことに家族が悲しまないですんだんだ…）
けれど、この気持はなんでだろう。

涙が止まらなかった。

第7話

何も告げなかったことが不器用な君の優しさだと知った

翌日、セスの目の前で泣いてしまったことを恥ずかしく思いながらキッチンに行くと、珍しくセスもそこにいた。朝に弱い彼がこんなに早くから活動しているなんて今日は槍が降るかもなんて思わず窓の外を確認したら文句なしの快晴だった。それにしてもなんで今日に限ってと内心思いながらどんな顔して挨拶しようだなんて考えていたところに、至って普段と変わらない態度で彼が先に口を開いた。

「昨日言い忘れていたけど、今日は暫く森に出て、夕方まで帰ってくるな。」

「え？」

昨日の出来事なんて一切記憶にございません。そんな態度に、そうだこの人こういう人だったと思いついた。なんだ、自分だけが馬鹿みたいじゃないか。

「て、え？なにわたしついに追い出される…？」

「違う、何を聞いているんだ君は」「今日は」「夕方」までと言っただろ。寝ぼけているの?」

ため息混じりのその言葉に、それだけはセスには言われたくないと思っ菜摘であった。いつもこれでもかというくらい朝に弱い低血圧人間の癖に自分のことは棚に上げて涼しい顔をするセスは本当にいい性格をしている。

「えーなんで」

「君は昨日食材をどうしているのかと聞いただろ」

「聞いたけど…それがどうして?」

この言葉に繋がるといふのか。しかしその問いに答える気はないらしく、それだけ伝えるとさっさと菜摘に背を向けてしまった。

常々この人は言葉が足りないと思う。頭の中では色々考えているのだろう(それも一瞬で)けれども基本は物ぐさな性格が手伝って口にするのは結論だけで、過程が抜けている。会話する側の事など一切考えないのだ。突然帰ってくるなど言われてもこの会話の流れからどう繋がっているといふのか。

もしかしなくてもこれを伝える為だけに、奇跡の早朝起床をやったのけたのか。

「意味わかんない」

背中を見送って暫くぽかんと、シルヴィに突かれるまでその場に立ち尽くした菜摘は、もしかしたら寝ぼけてるのかも、と思った。

しかし駄目だと言われると逆らってみたくなくなるのが人間である。

「絶対おかしい。何か隠してるよ。」

家に近づくな、と言われた筈の菜摘は、家の庭の直ぐ側にいた。申

し訳程度に木の陰に隠れて顔をそっと覗かせて辺りを窺う姿をセスが見たらなんと言うだろうか。きつといつものように眉間に皺を作っつけて言うだろう。

「何してるの？」

「そうそう絶対言うに決まってる……ってええ？」

後ろを振り返るとそこにいたのはセスではない。声の主もセスではない。見知らぬ男がそこにはいた。年はセスとそうかわらないだろう20代前後の綺麗な人だった。この世界は美形率が高いのか、同居人のお陰で免疫がついた菜摘の目から見ても爽やかな笑顔で見つめられるとドキドキと胸が早鐘を打つ。突然後ろから声をかけられたからかもしれない、心臓が飛び出しそうな感覚って本当にあるんだなと思う。

驚かせた張本人を恐る恐る確認して頭が痛くなった。綺麗に切り揃えられた金髪の髪と人なつっこいエメラルドブルーの瞳が面白そうに菜摘の姿を上から下まで眺めていた。眺める、というより観察と言ったほうが正しいかもしれない。綺麗な人にこうやって遠慮なく観察されるのははつきり言って恥ずかしく、居たたまれない気持ちにさせられる。

「……………」

美形と見つめ合うってどんな感じ？聞かれたら今なら即答出来る。眩しくて目が潰れそうです。間違っても目がハートになるという現象は体験できません。可愛らしく頬が赤く染まる前に引きつります。

「ど、どなた？」

菜摘が切り出さなかったら相手はずっとそのままだったのかもしれない

ない。菜摘が喋ったことにか、若しくはそれ以外の何かなのか、青年は驚いた表情を見せた。

「いやそれ僕の台詞なんだけどな。」

「え？わたし？」

「そうそう。こんな所で何してるのかな？君は何者？」

にこり、と微笑まれる。それもただの微笑みではない。バックに豪華絢爛な花を背負っている錯覚さえ覚えるような整った微笑。美形の笑顔は時に脅威である。綺麗な顔ならセスで免疫があるけど、笑顔には免疫のない菜摘なのであった。思わず背筋がぞくりとして、逃げられるなら逃げたいという気持ちすら湧いてきた。何故って整った笑顔であるのに、目が笑っていない。曖昧な返答は許さない、そう瞳が語っていた。

(こ、怖ええええええ！！わ、わたしなんで初対面の人に脅されるわけ?!)

思わず腰が引ける。いや、腰が砕けそうだ。

「何者と言われましても。ただのただ者ですが。」

果たしてこの状況でそれが通じるかどうか。菜摘の現在の体勢セスの家を怪しく覗き込む不審者を絵に描いたような今の状態ではまるで説得力がないな、と思った。相手も同様のことを思ったらしい、一瞬きよとん、と菜摘を見たあと可笑しそうに笑う。

「駄目だよ誤魔化そうとしたって、全部吐いて貰わないと。」

「吐くって物騒な…。何者もなにも本当に見たとおりのただの一般人のただ者ですけど？ただちよつとこの体勢はですね、わけありつていうかすみませんそろそろ体痺れてきたんで普通に戻していいで

すか？」

発見されてから石像のように固まった菜摘は、不審者よろしく木陰から覗き込む体勢から器用にくるりと首だけを後ろに向ける形のま、謎の美形と対峙していた。とにかく無理な体勢のせいで首！首がやばい。

「ふふふ、どうぞ」

「あ、どうも。」

笑顔で了承を得るとなんとか体勢を立て直して今度は真つ正面から青年と向き合う格好になった。どちらにしる菜摘には逃げ道がないということだ。首を回すと案の定ゴキゴキと嫌な音がした。

「一般人、ねえ」

菜摘の言葉を吟味するように反復する。

「君はこの森が何処なのかわかって言ってるのかな？」

「この…森…ですか？」

確かセスに出会った初日に、なんとかの森と教えて貰った気がする。悲しいかな、彼の言った通り菜摘には覚えることも出来なかったが。

「そう、ここが、アレトゼー家の私有地だって分かってる？君の言う一般人は立ち入りが許可されていないはずだけだ。」

「そ、そうなんですか?!」

「残念ながら嘘ではないね。」

うっかりだ。セスが何も話さない上に、自分も何も聞かなかったの

でうつかりしていた。この森にそんなやんごとなき理由があっただなんて。

(ふ、不法侵入ってこと?!!)

「その、私有地って事はなんとか家の私的な土地って事ですよね…? 無断で入ってしまった場合は、そのう、処罰、とかあったりします?」

何も知らずにのほほんと暮らしていただなんて。

「場合によってはあるだろうね。無断っていうのはどんな場合においても許されるべきことではないだろう?」

「仰るとおりです…。」

「で、そろそろ僕の質問に答えてくれるかな? 君は何者なのかな?」

「何者って…本当に名乗るような程の者でもないんですけど。参ったなあ…。」

こんなイケメンに名前を聞かれるだなんて、なんか照れるじゃないか、それが職務質問のような事務的なものであっても。ちよっぴり気恥ずかしい気持ちを隠せない。えへへと頭を掻いて照れ笑いを浮かべる自分も案外俗物だなと思う。

「古暮菜摘っていいいます。ええとナツ、が名前でコグレが名字かな。」

「ナツ、変わった名前だね。それで?」

「それで?とは?」

「まさかそれだけで素性を明かしたつもりなのかい? 名前なんていくらでも偽装できるだろう? そんなものなんの証明にもならない。」

僕が聞きたいのはそんなことじゃないってわかっているだろう？」

手厳しい。その眼差しからも一切の嘘、誤魔化しは通用しないと伺える。厄介な人物と関わってしまったものだ。こんな時に自分を証明できるものがあれば。まだ学生の身分なので免許証なんて持っていないし。持っていたとしてもこの世界では役に立たないけれど。

「他に説明できることがないんです…。」

本当に。この世界では戸籍も住居も持たない。唯一自分を証明出来るものは名前しかない。

まさか、『異世界から来ました』などと正直に言うわけにもいかない。それだけは珍しいことにセスに固く止められていた。

「それは自分で『胡散臭い人間です』って言っているようなものだよ。」

話にならないね、と言われればそれまでなのだ。

「うっ…、確かにそうですけど、それに対しては否定しませんけど。」

「このままでは不審人物として処理しなければならぬな。」

「処理ってなんて物騒な単語を…！！て目が笑ってないし。」

「そうだ、わたし、ここにセスさんって人と一緒に住んでるんです。」

それって証明になります？目の前の家を指しながら相手の顔色を伺って吃驚した。ずっと冷えた眼差しを携えたものの笑顔を絶やさなかった青年が、

「冗談だろう？」

驚愕すると同時に、信じられないものを見るように菜摘と指の先を交互に凝視した。

(え　　なにこの反応?!)

「セス…だつて？」

彼の言うセスと菜摘の言うセスは同一人物なのか、青年はそれを確認したいようだった。この森に住む人物はただ一人しかおらず、名前までもが一致するとなれば疑いようもない事実であつたとしても。

「僕の知るセスは君みたいな子と同棲するなんて軽率なことをする人間じゃないと思っっているけれど。」

やはり冗談なのだろう？しかし、少女に最初声を掛けた時に何うようにして身を潜めていたのは間違いなく、彼の家。何が真実にしろ、セスに関係があるということは間違いではないだろう。

「ぶはっ、あたしも貴方の言いたい事わかりますよ。」

彼は遠回しに言っていたけど、菜摘にはそんな気を遣う義理もない…と言つたら仮にも拾ってくれたセスに対して失礼だろうか。

「あの人嫌いのセスがこんな小娘と、あろうことが同じ屋根の下に住むなんてちよつと考えられないですよ？ていうかありえないですよね？わかります。」

うむ、と頷く。この数ヶ月、毎日顔を合わせた菜摘としてはそれなりにセスという人の事を彼女なりに知ったつもりだ。

「本当なのかい？」

そもそもあのセスに知り合いがいた、それだけで興味に値する。

相手も同じだったらしく、もっと観察しようと思つて頭を上げた所で目があった。少しは警戒を解いたのだろうか菜摘の言葉を聞いて、再び口元に笑みが戻る。違つのは、尋問するようなそれではなくて、玩具を見つけた猫のような目をしていることだ。

「本当だよ。」

菜摘が答えるより早く第三者の声が割つて入つた。

痛めたばかりの首を恐る恐る捻る。痛いとか言つてる場合じゃない。背中越しに突き刺すような冷たい空気を感じている。背筋は凍り付くような。嫌な予感しかしない。

「……セス?!」

現れた噂の人物は、今まで見たどれよりも機嫌が悪かつた。菜摘に特殊な力が備わっていたら彼の背後に怒りのオーラが見えただろう。

「君は人の言つたことを理解する脳もないのかい？」

彼の心底嫌う『面倒事』を引き起こした張本人をじろり、と睨みながら腕を組み家の壁にもたれていた。

滅多に家から出ない彼がどうしてここに?そんな気持が顔に出ていたのか鋭い視線が菜摘を射抜くと、思わず一步下がって狼狽えた。

「……ごめんなさい。」

謝罪の言葉など気休めにもならず、険しい表情は緩められることなく、

音もなく現れたセスは音もなく菜摘の目の前になると、す、と手を伸ばした。そのただならぬ雰囲気反射的に菜摘は目を瞑って構えた。まさかのDV?!

「……………いひゃい」

「謝るくらいなら素直に聞いていれば良いものを」

「ほめんなひゃい」

抓られた。

両頬を思いつきりと。菜摘自身も自分の頬がこんなに伸びるだなんて思わなかった。しかし地味に痛い。

「せすひゃんいひゃいれす!」

「反省しろ」

「ひてるうー!」

「……………仲良しなんだね?」

一瞬彼が居たことを忘れていたなんて言えない。

不機嫌そうにセスが彼の方を向くようやく頬が解放される。ああ痛かった。コレ絶対赤くなってるよね?菜摘を余所に美形二人は対峙していた。二人の関心が自分から反れた事にこっそり安堵しつつ、今度はさりげなくセスの背後に隠れて様子を伺う。

「やあセス。元気そうで何よりだよ。」

空気読めよ、と突っ込みたくなる位場違いに陽気な声。

「……どうして君が？いつもはオラヴィが来る筈だろう？」

対するセスは地を這う程低い、不機嫌丸出しの声。お前は少しは態度控えるよ、殺気で人を殺せる男、それがセス。

「わお、見ない間に随分と面白い状況になっているみたいだね。彼女が言ったことは本当だったんだ？」

「ヘルベルト」

あくまで戯けて見せる青年、ヘルベルトに向けるセスの表情が恐ろしい。丁度ヘルベルトと菜摘の間に入ったセスの様子は背中しか伺う事が出来なかったのが幸いかもしれない。彼は自分の機嫌が悪い時に限って気が短い。普段は面倒面倒と言って大抵の事は流す癖に。そういう時は誰にも手に負えない暴君と化するのだ。狂王がご乱心じや！と危うく人生を諦めかけたあの日の出来事を菜摘は忘れる事が出来ない。くわばらくわばら。菜摘はセス辞典からその項目を引き出して身を縮めた。既に声だけでも竦み上がりそうだと言うのに、それを真つ正面から受け止めているヘルベルトは怖がるどころか戯けたように肩を竦めた。流石、セスの知人である。この人も存外ただ者ではないということだ。

一方でセスの今朝の不可解な行動は、知人が訪ねて来る事への布石だったということに今更ながらに気が付いた。セスが腹を立てているのは、予定とは違う人物が来たこと。それは彼にとっても全く寝耳に水だったらしい。全くの不意打ちの訪問。完璧主義者のセスにとって不測の事態は好ましくない筈。加えて忠告に逆らって興味本位で首を突っ込んでしまった菜摘の行動。訪問人と遭遇しないようにという彼なりの配慮が水の泡になったのだ。これが怒らずに居られようか。今更ながらに後悔と申し訳ない気持で一杯になって

目の前の背中を見た。

「わかったわかったそう睨まないでくれないか、そうだよ、今日は無理を言っただけで貰ったんだ。君が女の子と戯れるなんていう貴重な場面に出くわしただけでも今回は役得だったかな。で、彼女は何者なんだい？」

「え」

再び二人の関心が自分に向く。菜摘は追いつめられた猫のように身を竦ませた。青年の得体の知れない笑みなんて比ではない。盛大な舌打ち且つ絶対零度の眼差しでこちらを睨み付ける少年が恐ろしくて仕方がない。

「セセセセセスさん…？キャラ違いますよ？」

（顔怖い、顔怖い。顔怖い…）

何の呪文?! 呪いの呪文?! 今なら赤くなつた頬をもう一度差し出せる。それで彼の溜飲が収まるのなら何度でも。

「セス、そんな顔で睨むから彼女怯えてるよ」

（お前がその原因作つたんじゃああああ!! とは言えない絶対言えねえー!!）

その似非笑顔を思いつきり捻りあげてやりたい、しかし美形の顔に傷を付けることなど出来ないチキンの菜摘。美形は国の宝。前に友人が言っていた言葉。今なら賛同できてしまう自分が憎い。いつから美形に頭が上がらなくなったのだ自分は。考えてみたら、セスとこの美形の代名詞に拾われた時点からかもしれない。それって最初っからではないか! ジーザス! 菜摘は天を仰いだ。

「あああああのですね！先ほども申しましたようにわたくしめなど
ほんとするに足りない一般人でして！気に留めて頂くほどのものでは
ございませんです！寧ろわたくしめの為にお二人の貴重な時間を
割くことの方が問題なのでは！……ひいつ？！」

無言の圧力に気が遠くなる。セスは口を開いていないのに、彼の言
いたい事が痛いほど伝わってくるとは。余計な口を挟むなし
やべるな存在を消せ 最後のは横暴すぎるだろ！何コレ以心伝
心？しかし欠片も喜べる筈もない。本気の殺気を感じて菜摘は口を
貝のように閉じた。

「君、面白いね」

きよとん、としたかと思うと唐突に笑い出す青年。

「え？」

「はいはい用件を言うよ。だから睨むなよ。」

実は届けたいものがあってね。」

言って、今までと表情を一変させ真剣な面持ちで、一枚の封筒をセ
スの前に差し出した。

「招集命令だよ、セーシウス・フォン・アレトゼー。」

その時のセスの表情を菜摘は生涯忘れることが出来なかった。

例えるなら死刑を宣告された囚人のよう。

菜摘には詳しい事情なんて分からない。けれども何処の世界にもあるのだろう。誰もが持っているのだろう、陰鬱とした闇を。手にした一通の白い封筒を前に宿ったその暗い光に、いい知れないもどかしさを覚えた。

彼の囚われの檻はこの森なのか、それとも

(…ん？アレトゼーってなんか聞いたような

うええっ?!!

セスがこの森の所有者なの?!!)

それは菜摘にとっても平和な生活の終焉を告げられた瞬間であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1670v/>

End Of Chapter One

2011年10月8日11時54分発行